

小田原史談

第 156 号
発行所 小田原史談会
小田原市栄町 2-13-20

北村透谷没して百年

短くして傷ましいその生涯と

輝かしい業績

高田 喜久三

小田原が生んだ偉才、明治文学及び思想界の先覚者北村透谷が没してから、今年はずいぶん百年目にあたる。透谷は慶応四年すなわち明治元年十二月二十九日、小田原町旧唐人町の小田原藩々医北村玄快の息快蔵の長男として呱呱の声をあげた。明治維新直後の激動する社会変遷の渦の中で、彼も亦多難多事の生涯を辿り、明治二十七年五月、東京芝公園内の自宅の庭で自らの命を絶ち、その短かった二十五年の一生を終ったのである。

私は、彼の生地と同じ小田原町旧唐人町に生れ、少年の頃、代替りしたものの透谷の生家をこの目で眺めつつ、毎日のように遊び呆けたものである。しかし、残念ながら透谷のことは父母からも、又、近所の人々からも一度も聞いた覚えはない。青

年に至って春陽堂の明治大正文学全集を予約購読し、その配本の中で偶然にも透谷の文章に接し、難解ながらも苦勞して通読したが、それだけで終っていつしか透谷のことも忘れてしまっていた。今、思えば彼が小田原出身であり、しかも我家から百メートルも離れていない場所が彼の生家であることをまるで知らずに過ごしたことが恥しい。だがそれほど私を含めて小田原の人は、文学に関心を持つ人は別として、北村透谷には無関心であったのである。

それには種々の理由があげられる。明治維新の江戸攻めに際して、たとえ一時とは言え小田原藩が反官軍の行動、すなわち維新箱根戦争の負い目を感じて、のちのちもこの事件を含めて過去に触れなくなかったのかも知れない。そして透谷が青年期に、

特集北村透谷

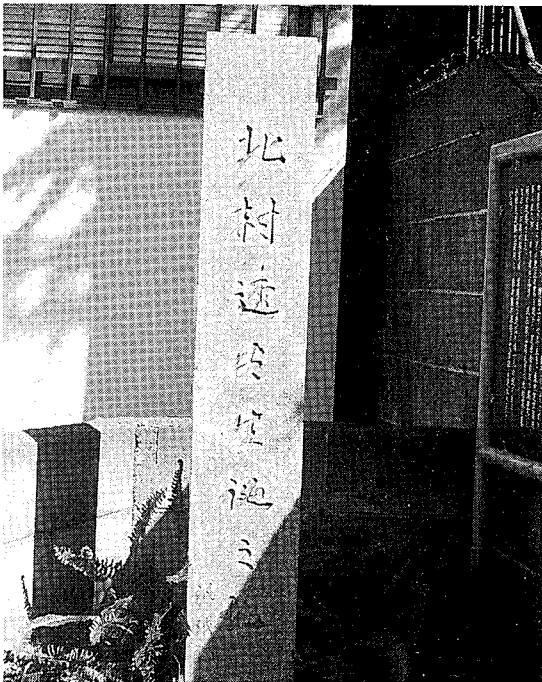
明治政府に反抗する自由民権運動に身を投じたこと。さらに惨憺たる逆境の連続に負けて自殺をもってこの世を去ったこと。これらのことが小田原人をして意識的に透谷の存在をうとんじたであろう。このことはのちに透谷文学碑を建てるにあたっても数々のトラブルを生むことになったのである。

明治十四年、門太郎(透谷の本名)が父母に伴はれ弟垣穂と共に上京したのは十二歳の時である。そして近くの泰明小学校の上等二年に入学した。この時奇しくも島崎藤村が同校一年に入学したことを透谷は知る由もなかった。この住居は教寄屋橋の

近くにあったので、彼はのちに透谷(すきや)と号したのである。

泰明小学校を神童と評されて卒業した透谷は向学の志已むことなく、山梨県南部町の蒙軒学舎や東京の共慣義塾にも入門したが、いずれも満足出来ず遂にノイローゼになり、父の勧めで放浪の旅も経験した。その後横浜のホテルのボーイに雇われたり、県議会の給仕になったりしたが、やがて当時澎湃として全国を風靡した自由民権運動に身を投じ、三多摩地方を小間物の行商をしながら宣伝活動をつづけた。だが彼の向学心はやがて彼をして早稲田大学の前身、東京専門学校政治科に入学せしめ、民権運動の暇をみては勉強したのである。

ところがその民権運動の中で得た畏友大矢正夫がいわゆる大阪事件に



北村透谷生誕の地

碑は、小島正治氏提供の土地に建てられ、国道に面していたが、昭和38年2月、現在地に移された。碑の揮毫は透谷の遺児堀越英氏による。



北村透谷(門太郎)十六歳の写真

余は実に過ぐる二三年の間を混雑紛擾の間に送たり。愛情の為財政上の為或は病気の為、是等のすべてが余をして何事も為すことなく過ぐる二三年を費消せしめたり。

よって逮捕入獄するというアクシデントに遭い、透谷は再び深い懊惱の日をおくる。偶々、神奈川県自由民権の領袖石坂昌孝の長女美那と出逢い、熱烈な恋に陥る。彼女は横浜共立女学校に学び又、熱烈なキリスト教信者でもあった。彼は美那の影響を受けてキリスト教に入信、洗礼を受けた。やがて石坂家の反対を押しきり、明治二十一年十一月三日彼は美那と結婚した。透谷十九歳、美那二十二歳である。透谷の結婚生活は始めから幸福なものではなかった。彼は生計の資を得る為に、教会関係の仕事に従事した。翻訳したり時には布教の旅に出たりしながらも文学への途を歩んで行った。この当時の心境を日記に次のように記している。

このように苦渋に満ちた日々の中から、透谷が筆を執って生んだ詩、紀行文、随筆、戯曲、評論の数々は、まことに洪水のようなスピードで、彼の終焉までの僅か三、四年の間の所産なのである。それらの著作を此処に掲げて解説するには、今は時間もスペースもない。極く一部のものの題名だけを次に誌して見よう。

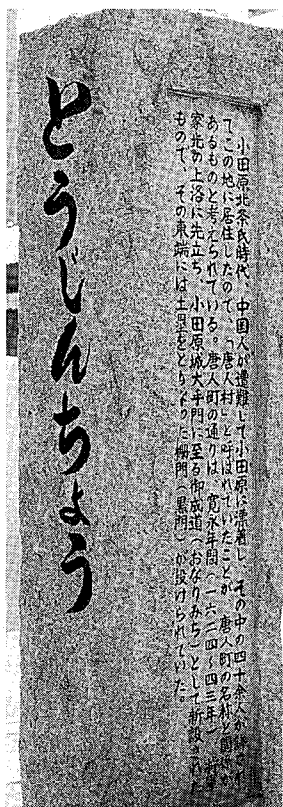
楚囚之詩、戯曲蓬萊曲、詩、ほたる、蝶のゆくへ、厭世詩家と女性、徳川氏時代の平民的理想、三日幻境、内部生命論、各人心宮内の秘宮、富嶽の詩心を思ふ、人生に相渉るとは何の謂ぞ、万物の声と詩人、一夕観、エマルソン研究

透谷のものを読む場合、先ず考慮しなければならぬ事は、彼が生きた明治初期という時期は、輝くばかりの欧米の文化が怒涛のように押し寄せる反面、封建的な風習又は考え方が、まだまだ根強く新しい浪の前に大きく立ちどかっていたことである。同時に芸術とか文学、評論に対する一般世人の評価は極度に低く、これに携はる者は常に生計に苦勞したことを考えねばならない。ある明治文士が言う「一本のペンは遂に二本の箸には敵はない」と正にその通りであったのだ。

透谷の著作はいずれも硬質な漢語文体で綴られていて、こんにちの人間には読みづらく、又、解釈が困難である。しかしその詩的リズムが躍動する文の流れは得難い名文である。しかもその内容たるや当時としては人を驚かす正に斬新なものであった。たとえば「厭世詩家と女性」の冒頭に「恋愛は人世の秘鑰なり」と断ずるなど、いまだ男女七歳にして席を同じうすべからざる語が罷り通っていた時代にとつてこの宣言は正に晴天の霹靂であったのだ。ちなみに「鑰」とは錠前のことで、人間恋愛を経験しないで何で人生の奥儀が判らうかと言うのである。又、形而上と言ふ言葉もなかった時代、彼は「想世界」の字句を創造して哲学の世界を展開している。

要すればいまだ哲学、歴史、文芸論のジャンルが確立せず、混沌雑然としていた明治初期において、透谷はこれらの分野に単身飛びこんで悪戦苦闘したと言つてよい。しかも彼自身は正統の学校教育を受けず、独学と彼自身の創造力によってこのように多彩な活躍を果たした

旧町名保存碑 唐人町



ことに、私は最大の賛辞を与えたいと思うのである。いま透谷の墓は東京から故郷小田原に移されて谷津高長寺に在り、彼の事績を顕彰する文学碑(島崎藤村揮毫)は城内馬屋曲輪の一隅にひっそりと鎮まっている。冒頭に述べたようにこの文学碑を、昭和四年大久保神社境内に建立するに際しても、その筋の許可がなかなか下りず、島崎藤村はじめ地元の小田原保勝会々長尾崎亮司氏外の方々の奔走によって漸く建碑することが出来たのである。尚、戦後の昭和二十九年、透谷没後六十年を卜して大久保神社から現在地に移したのである。

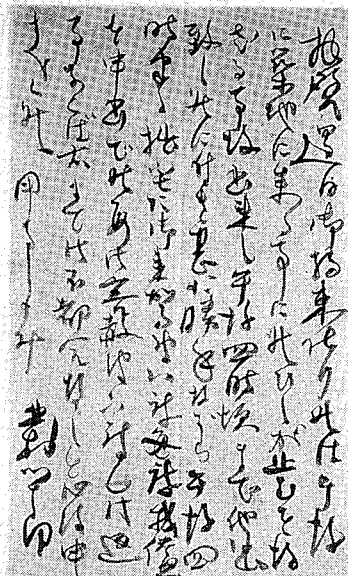
又、この時、透谷唯一人の遺児堀越英さんの手に成る「北村透谷生誕之地」の記念碑が旧唐人町の生家跡に建てられた。私は堀越英さんの長子堀越真一氏と、私の「北村透谷物語」によって親交を結び、同氏は私たちの小田原史談会の会員に入って頂いたことを付記してこの文を終る。

北村透谷君

島崎藤村 述

月日の経つのは早いものですな。北村君が亡くなつてから最早十二年目に成りますよ。私は出版の用事で数寄屋橋の方へ度々出懸けるものですから、以前の北村君の家の前をよく通ります。数寄屋橋から尾張町の方へ向つて行きますと、丁度秀英舎の並びで彌左衛門町の角に煙草屋が有りませう。あそこに北村君の御両親が長く住んで居られて、實家の本姓は丸山と言ひますから○の内に山といふ印をつけた暖簾を懸けて、矢張煙草屋をして居られた

透谷より藤村に宛てた書簡(透谷会絵巻書)



北村透谷宛へ藤村島崎より宛てた書簡

のです。あの二階建の家は北村君が生立ちの古巣といふべきところで、少年の頃にはあそこから泰明小學へ通つたさうですし、青年時代にもあそこで勉強したんださうです。『蓬萊曲』などはあの二階で書いたとか言ひました、私共が知つてからの北村君は別に家を持つて居ましたが、それでもどうかすると其家を疊んで、あの煙草屋の方へ一緒になつて居ることがあり亡くなる前にも幾月かあの二階に起臥して居りました。私などはよく遊びに行つた

ものです。斯ういふ歴史が有りますから、あの家の前を通る度に昔のことを思つたり今のことを考へたりして、言ふに言はれぬ可傷しい心地に成る。時には煙草を買ひに寄つて、それとなく聞いて見ると、今ではもう三代も家の人が變つたさうです。しかし代が變つても商ひだけは同じですから、北村君の家で煙草屋をして居られた當時の店の様子が何となく残つて居るやうに見える。母親さんは氣性の勝つたしやんとした人で、私共が訪ねて行くといつても店に座つて居られました。が、なんでも商ひの方のことは獨りで切廻して遣つて居られたやうでした。私の思ふには、北村君のあの熱烈な性情はどうも母親さんから享け繼いだものらしいのです。父親さんですか、父親さんのもと小田原の藩士で、瓦解このかた役人をして居られたこともあると聞きました。好い性質の父親さんだと記憶して居ます。當時御院殿に住んで居られる畫家の丸山古香君、あの人は透谷君の弟ですが其弟の方が實家を繼ぐことになり、兄さんの透谷君は別に

北村の名跡を襲つたのだといふことでした。言はゞ分家のかたちですな。私もよくは知りませんが、なんでも北村は叔父さんの家だとか言ひましたよ。尤もこれは古香君にでも聞いて見なければ判然しません。

北村君は、私共の仲間のうちで、早く結婚した方でした。細君はお皆さんと言つて石坂昌孝さんの娘です。お英さんといふ子が一人ありました。『ふうちゃん、ふうちゃん』と言つて皆に可愛がられました。斯ういふ風に、私共と一緒に仕事をしました時分、世帯持といへば北村君一人、年齢から言ふと兄さんの星野君が一番の年長でこの人は松井おまんさんといふ才女を娶りましたが、しかし其もずつと後の話でお互に年は若し、萬事書生流の交際でした。私は其頃非常に困難して居りまして、どうして母や姉を養つて可いか解らない位の境遇でしたが今から考へて見るとまだまだ私のは身の振り方に自由なところも有りました。そこへ行く北村君の妻を引連れて逆境と戦ふのでしたから、生活上の困難は一

通りでなかつたらうと思ひやられます。なにしろ時世が時世であつた上に、飽くまでも一つの精神で押し貫かうとした北村君のことですから、筆ばかりで糊口は出来ません、雑誌やなんかを書く傍らある學校へ教へに行つたり西洋人の手傳ひをしたりして、妻子を養つて居たのです。『貧詩人の悲しさ』といふ言葉はよく北村君の手紙に在りました。『饑』といふ題で何か書いて見たいとも言つて居ました。さういふ生活上の苦痛を切實に感じもし考へもして、日頃の思想が眞面に入生に觸れて居たとは、北村君の書いたものに顯れて居ると思ひます。

それにしてもあの苦しいなかで、北村君はよくやりましたね。『厭世詩家と女性』といふものを書いたのが二十五年の二月頃で、『一夕観』などの出来たのが二十六年の十一月ですから、あの透谷集全部は僅か二年間の事業なんです。北村君はよく引越して歩きました、麻布の霞町にも居りましたし、品川の東海寺の邊にも居りました。『ふうちゃん』の生れたの

は品川の家でしたらう。芝公園の紅葉館の裏手にも居ました。『山庵雜記』にあの邊のことが書いてありますが、鬱蒼と樹木の茂ったところで、小山に添ふて飯倉の方へ出やうとする細道の側でした。あそこへ訪ねて行つて話して居るうちに飯時になると、何も無いが味噌汁で飯を喰つて行つて呉れ給へなんてさう言つてよく御馳走になりましたが、二人して質素な食卓に相對になつて、其頃北村君が世話して居た親類のお婆さんに御給仕をして貰ひ乍ら、

喰つたり話したりしました。け、それから又、北村君は國府津の海岸に近い寺を借りて居たことも有りました、丁度蜜柑の熟する頃私も出懸けて、一緒に蜜柑畠の日あたりの好い處で足を投出して話したこともあり、浪の荒い國府津の海へ行つて競争で泳いだことなどもあつたのです。『一夕觀』はあそこで出来たものですが、あの文章などを讀んで見ると、天地悠久とも言つたやうな情趣が涛の音や空の星に寄せてあつて、北村君の思想の高潮に達した時代

であることを想像させます。殆ど絶望に近い驚異の念、さまざまの世の悲哀を通り越して始めて味はれた自覺の意味、それはあの短い隨筆のうちに活き籠つて居る。あの頃北村君が書いたものは殊に深い象徴的色彩を帯びて居るやうに見えます。其後、國府津を引揚げて彌左衛門町の方へ移り、彌左衛門町から復た芝の公園へ移りました。

斯ういふ風に、幾度か住居を變へたことは、北村君の心の内部の光景をも克く顯して居ると思ひます。動搖した精神と——露西亞の小説家が言つた言葉は、北村君のことにも宛て箝るでせう。友人と一緒に酒を飲み乍ら沙翁(シェークスピア)の戯曲を評したり、夜を徹して當時の文學を論じたりするかと思ふと、翌る日は宗教の傳道に出懸ける、まあ左様いふ遣り方でした。『他界に對する觀念』などを見て解りますが、あゝいふ深刻な宗教思想と、一方には『精神の自由』とか『情熱』とかに見えるやうな奔放自恣な感情とこの二つが絶えず心に戦つて居た

やうでした。詩人であると同時に思索家である、斯う北村君は評されることを悦んだのです。二十六年の暮あたりからは、もう筆を執らないで、自分の子供には決して文學などはやらせないやうに、と言つたやうなことが日記に書いてありました。亡くなる前には餘程身體を害して居て——一體平素からあまり身體の強い人では有りませんでした、加に精神上の煩悶も深くなる、終には醫者の勤めでモルヒネ劑の力で僅かに眠るといふ風でした。最後に芝の公園の舊家へ移りました。

故北村透谷

坂本易徳 談

舊同藩人のことですから何か承知して居らうとの事で、故人透谷北村門太郎氏の事を私に話せと被仰るのですか。本年九月の『新古今文林』で「明治文士の悲惨なる最後の状況」を掲載する時に、此の北村氏のことについて何か書こうと思ひましたが、同藩同郷といひながら、極く幼少の時互に

遊んだ事がある許りで、後にお話しますが、青年時代には全く交際が絶えて、文士たる北村氏は如何であつたか餘り多く知りませんでしたから、其の親戚や何かに就いて問ひ質だして書かうと致したものの、例の私のごとく延び々々になつて了ひましたし、又吉江狐雁君(新古今文林主任記者)

の話しに北村氏の分は其の平生文士交際のあられた島崎藤村さんが受け持たれたといふ話でありましたから、單に同郷といふ事を知つて居るに過ぎぬ私の書いたものより、其の方が文士たる北村氏の面目を寫すに都合が好く、又悲惨の状況も能く分るだらうと思ひまして止めました。又何時も與謝野君とは此の北村氏の話が出て、同郷のことだから調べる便宜もあらうから其の傳ふるに足るものを書いたら何うだなどとお話しが御座いますのですが、これ

といふ機會も無くて今日に成りました。未だ誰にも聞き質さず、文士としての北村透谷は何んな人であつたか能くも知りませんが、島崎藤村さんが述べられたる中に、間違のあるのが私の動機になつて居る矢先ですから、今日の御訪問を幸として思ひ浮ぶまゝを少しお話し致します。何れ又何か折りでもあつたら、能く取調べて書きたいものだと思います。

そこで私は江戸で生まれましたのですが、學齡に達した頃は最早一家は郷里(小田原)に引き移つた後のことでしたから、其處の小學校に入學致しました。その小學校に北村氏も入學致したのですが、其頃はまだ神童とか何とか謂はれるやうな事は無かつたので、平凡の生徒であつたのです。今畫家になられて居るといふ北村氏の令弟の丸山君の方が、年齢の割に上級に居られるといふ點で、ちやはや云はれたのを記憶致して

居ります。其頃何ういふ規則があつたのですか、小兒の時分の事ですから能く覚えて居りませんが、連続といふ事がありまして、一度の大試験に二級も卒業するのです。此連続の爲めでもあつたらうと思ひます。年齢の違はない北村氏と私とは同じ級に椅子を並べたといふ事もなく、餘り人目に立つた事のない同氏の事ですから、頓と運動場か何かで一所に遊んだ事も無いやうでした。所が僕に病氣が起りました。病氣といふと大袈裟に聞えますが、寒中になりますと霜焼が起るのです。此の霜焼や火傷の薬が北村氏の祖先の玄快といふ漢方醫の創製になつて居つて、郷里では有名な薬で、金明膏と云ふ其の實名を呼ぶ者は無く、北村のやけどの薬、玄快さんの膏薬といつて有名なものでありました。此の薬を僕が北村氏の家に貰ひに行くやうになりました。北村氏と懇意となり、一所に遊ぶやうになりました。又最も一層懇意になりました。今申上げた小學校の事務員で、其の頃我々が月謝の先生と呼んだ磯田といふ老人が、學校を退い

て撃劍の教師を聘して道場を開いたのです。月謝の先生といふのは、學校で何も授業しないで事務のみを取扱ふ人なので、我々小兒の目から見れば、月謝を此の人に納めると云ふことより外は知りません。其頃事務員などといふ語は知らず、他の先生を先生と呼びますから、此の人も先生と云はなければ悪いと思ひまして、さりとして他の先生とも違ひますから、誰いふとなく月謝の先生といふ語が出来たのです。小兒時代の造語は一種變なものだと思ひましたから一寸申し上げて置きます。そこで此の道場に我々も入門したのです。ところが北村氏と小生とは此の一番年少ではあるし、双方共に腕力は弱く、漸く竹刀を振廻はすことが出来る位ですから、極く好い相棒でした。試合か何かの時分には能く兩人が取り組まれたのです。これが親しくなつた他の一つの原因と云つても宜しいでせう。斯ういふ様な事で親しくなりましたもの、唯小兒同士の交際で、別にこれぞと云つて申上げることも記憶に遺つて居りません。

一寸此處で申し上げて置きますが、前申した通り、北村氏の祖父は玄快といふ漢方醫で、此人の子息即ち北村氏の父の快藏といふ人は、通常ならば父祖の業を紹げて醫者になられるのですが、それを嫌つて早くも東京に出て、何か仕官をされたのです。僕が北村氏と懇意になつた時分は、氏の家には同君と祖父母の君と令弟の丸山垣穂君だけが居られて、両親は既に東京に來て居られたのです。

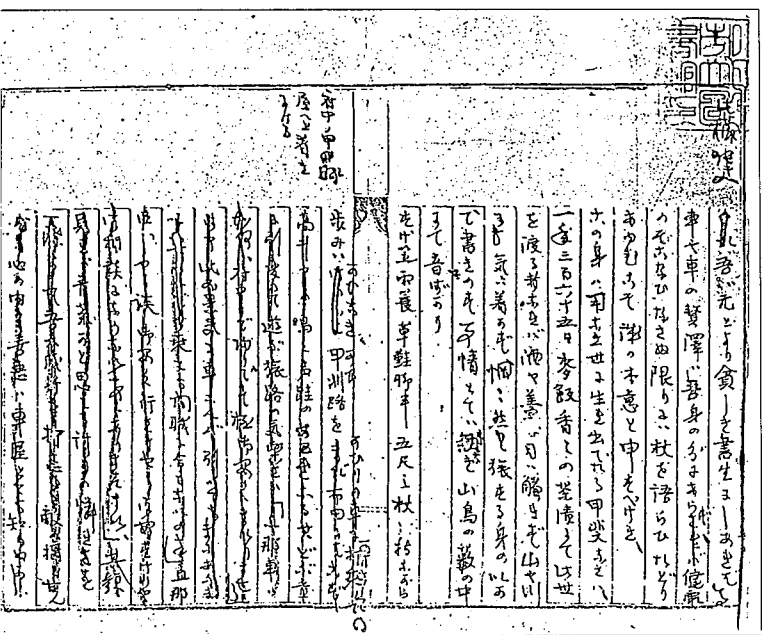
それから北村氏の東京に出られた事ですが、祖父母の君と共に東上せられたる事やら、或いは祖父の君が亡くなられた爲であつたか、其邊のことは今記憶して居りませんが、未だ同氏が小學校を卒業せられない前であつた事だけは確かです。私は猶郷里の小學校に居るといふ工合で、小兒の時分のことでですから、此處に交際は絶えて仕舞ひました。

(以下次号)

(説明) 島崎藤村の「北村透谷君」は、明治三十九年(二〇〇〇)九月発行の『新古文林』に収録されていたものである。なお、この雑誌は、前年の

五月の創刊で、国木田独歩編集による家庭向月刊文芸雑誌として、近事画報社が発行。三十九年七月、発行元の名称は独歩社となつたが、独歩の病氣により、四十年三月、第三巻三号で終刊となつた。坂本易徳の「故北村透谷」は、『新古文林』より一カ月遅れて、『明星』十月号に掲載されたものである。この坂本易徳の談話は、本誌に連載の『紅蓮洞・坂本易徳』に引用しているが、透谷の小田原時代を知る唯一の資料であり、また、坂本が透谷について語る

動機は、藤村が『新古文林』で述べた内容に間違いがあるからとしており、対比の意味でここに再録をした。なお、『明星』は、與謝野鉄幹主宰の東京新詩社機関詩歌新聞として明治二十三年(一九〇〇)四月創刊されこの年九月第六号から雑誌の形となり、明治四十一年(一九一六)十一月、百冊で終刊となつた。さらに第二次(大正十年十一月)昭和二年四月通号四十八冊で終刊)、第三次(昭和二十二年)同二十四年十月通号十六冊で終刊)と続いた。



北村門太郎君逝く

『函東会報告誌』

明治二十七年七月
第三十七号所載

北村門太郎君は如何なる人なりしぞ、幼にして活潑、其性全く凡俗と異にす、若年にして郷を出で千辛屈せず萬難撓まず、時に快活なる運動をなし時に或は豪遊を試み、親しく交る者といへども能く君の言行を窺ふ能はず、漸くにして君大志を以て基督教徒となり、親しく外人に就きて英學を修め其教會に属する新聞雜誌に筆を執り、其間奮勵終始撓まず、後明治女學校に聘せられ教授の任に至るに及んで氏が勉勵の結果其特質愈々現はる、或は「女學雜誌」に或は「評論」に或は「文學界」に、常に君が神髓を見ざるなく、時に或は國民之友に諸家の耳目を驚かし、實に君が筆する處歌ふ處のものは萬感神腦(はかり知れない神のような働きをもった頭脳)に集まつて其餘烟の一方を開きて噴出するが如く、悠々自から行

ひて停まる所を知らず、變化流轉せる萬法は君が目には遙に然か影せざりしなり、君曾て蝶の行衛をうたへり、春の日永に双蝶のたのし氣に舞ふを見て君が心裡に印銘せる萬感は顯して忽ち有韻の文字となる、君が常に知らんと勉め、君が常に筆を執つて措かざりし所以のものは、内部の生活にあり、自然の神髓にあり、精神の快樂は君が常に得んと望みし所のものにして、未だ全く其境に入る能はざりしとするも君の筆する處のものに於て吾人は君が無意識にも其境に徘徊せしを疑はざるなり、吾人また多言せず、世人は記憶す透谷庵主が現文學界に如何なる關係を有するかを、透谷は實に君の號なり、透谷庵主を知るものは記憶す、函東會々員たる北村門太郎君が如何に文學界の一角にあつて新面を開きたるを、君が文學

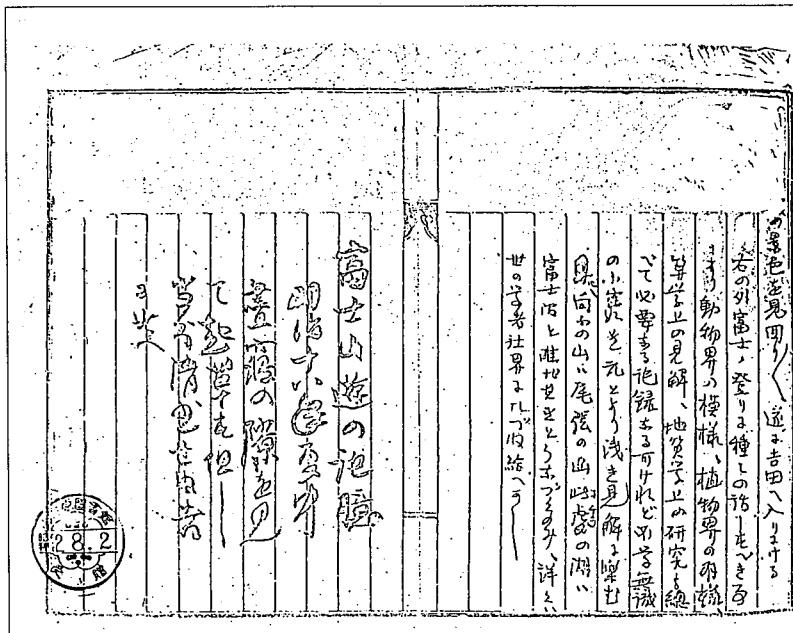
界に爲せし所のもの一にして留まらず、然りとはいへども其業半途にして五月十六日を以て君長逝せらる、享年廿有餘願ふに精神上の研究は遂に君をして無限の幽界に逝かしめしなり、實に君は斯道(専門)としてゐる分野)の爲めに仙逝(死ぬこと)の敬語)せり、天君に壽を藉さば偉大なる事業をや見ん、悲哉中道にして之を奪ふ、痛歎何ぞ措かん、然りと雖君が形骸の亡びたるの故を以て君の精神上的事業は滅しするものにあらず、明治文學界は君が芳名を千載(とわ永久)に傳ふるや必せり、君希くは瞑せよ、神腦錯雜して言ふ所を知らず、無言(粗雑な言葉)以て君が靈を弔す

(説明)

追悼文中「明治文學界は君が芳名を千載に傳ふるや必せり」という言葉は、まさに正鵠を得た評であるが、残念ながら筆者は判らない。

『函東会報告誌』は、明治十五年(一八八二)三月足柄上・下郡の在京学生をもつて組織された函東会の機関誌として明治二十二年(一八九)十月に創刊された。

北村透谷が函東会に加入したのは、彼が長詩「蓬萊曲」を発表した明治二十四年(一九〇一)で、同年九月発行の『函東



「富士山遊の記憶」の原稿は、昭和二十九年五月十五日、透谷碑移転除幕式並遺稿伝達式に於て、堀越英氏が小田原市に寄託されたもので(十ページ参照)、和紙小型郵便紙二十六枚に及ぶ。

ここには、最初と末尾の原稿を示した。末尾の自筆奥書には「明治十八年夏中昼寝の隙を見て起草す 但し当分清書せぬ者に候」と記されている。透谷十八歳の作である。

会報告誌」廿号に、函東会の足柄部大会が、鳴鳴館(小田原・御幸浜)で開催され、出席者二十九名の中に彼の名があり、その席上で「北村門太郎氏、戯曲音読」が行われた、とある。

翌二十五年三月発行の同誌第二十二号に「補助編集員北村門太郎」とある。その責を果たしたのか、翌月発行の第二十三号には「漫言一則」と題した彼の短編が掲載されている。

北村透谷君

戸川残花談

透谷氏の如きは天性の厭世家と云ふべきであらう。其愛読の書籍の中には佛教的のものもあつたが、其厭世觀と云ふのも佛教的な所もあつたやうに、思ふ。其外の愛讀書はバイロンなどで、バイロンの作マンフレッドに習つて『蓬萊曲』と云ふものを作つた。

常々能く云つて居た言葉に、死んでから墓の中から足を投げだしてゐたらさぞ愉快であらうなど、云ふのを聞いたが、其からして『鬮の舞』と云ふ作も出來、自分も遂に墓の中の人となつて了つた。

常々田園生活と云ふ事を好んでゐた結果からか、麻布の櫻田町で野羊を飼つたり、兎を飼つたりしてゐた。其時は随分滑稽の話もある。麻布へ行かない前には數寄屋橋外の煙草屋が自分の家で、其二階が子の書齋になつてゐた。透谷と云ふ字は此數寄屋と云ふ字から來たのである。家庭内は色々

複雑な事情が有つたらしい。

詳しくは知らないが、随分子に取つて面白くなかつた事も有るやうだ。が、細君と云ふ人は、英和女學校出の人で、能く透谷子を解してゐたらしい。今此人は透谷子の遺志に従つて渡米して居るが、何か慈善事業に従ふと云ふ事である。透谷子には弟があつて古香と云つて日本畫師である。天才的の系統は其家に傳つてゐたものと見える。透谷子は數寄屋橋の此家に居た頃田村直臣氏の教會へ行つて居、後麻布のパプティスト教會へ行つて居たやうに覺えてゐる。

今でも紅葉館の二階から見ると、池を隔て、向ふの方に、懸崖の上に小さな家が軒立つてゐる。此家の子の最後を見た家で、其夜は何でも月の美しい涼しい夜であつたとか聞いてゐた。細君は深く注意してゐたにも關らず、少しの隙を見て自殺されたとか聞いてゐる。

自分の考へでは、子の自殺と云ふ事は、探ねたらば色々複雑な原因もあらうが、第一は自然の美に同化して知らず知らず死と云ふ事に成つたらうと思ふ。曾て山水の美しい大和の奥へ入つて行つて、如何にも風光の美はしいので我知らず頭を巖に打ち當て、無意識の内に死なうとした人があつたが、其れと同様に子も風光の美に誘はれて、我れ知らず死の境には入つたのでは無いかと思はれる。

子が佛教の方で慕つて居た人物は、西行とか長明とか、云ふ人々のやうに思ふ。厭世と云ふ傾向は子の腦中にしみ入つてゐたので、新時代の詩人として第一の厭世家とし子を思はずにはゐられない。

明治三十九年九月発行
『新古今文林』第二卷第十一号

(説明) 戸川残花については、あまり知られていないので、平岡敏夫氏執筆の『日本近代文学大辞典』(講談社刊)より、その一部を引用しておきたい。

残花は号で、通称単人、諱は安宅。安政二年(一八五五)十二月、江戸で旗本の家に生れ

た。慶応四年(一八六六)の戊辰戦争で彰義隊に参加。その後、大学南校、慶応義塾で学んだ。明治七年(一八七四)受洗、のち牧師としてキリスト教の布教に従事。かたわら、『日本評議論』『文学界』などに詩文を発表。

特に明治二十六年(一八九三)六月発行の『文学界』に発表した新体詩「桂川」一情死を吊う歌は、北村透谷が、このような佳品は明治詩壇で果していくつあるだろうか、と激

賞している。のち毎日新聞社に入社、小説をも執筆するようになった。

明治三十四年(一八九一)日本女子大の創設に当り国文科教授となった。幕臣としての出自から『三百諸侯』『河合継之助』『海舟先生』などの著述を残している。晩年にはキリスト教に老荘思想が加わり清貧のなかに風韻のある生涯を送つた。大正十三年(一九二四)没。六十九歳。

透谷の墓所

透谷と夫人の美那の墓は、透谷没後六十年忌を前にした昭和二十九年(一九五四)五月十三日、東京芝白金台の黄檗宗・紫雲山瑞聖寺の墓地から小田原市城山一丁目曹洞宗・栖龍山高長寺の北村家の墓地に改葬された。

二人の遺骨は、祖父玄快と父快藏の墓の中間に埋葬され、高長寺では、新に、「透谷院無門章賢居士」「透岡院章室貞観大姉」の戒名をおくつた。

墓碑「北村門太郎之墓」は、瑞聖寺に建てられていたが、同年五月二十七日、高長寺に移された。



透谷碑のこと

岡部 忠夫

尾崎亮司が、西村隆一に語り、透谷記念碑の建立を発起したのは、昭和二年(一九二七)の春ごろかと思われる。

詩人の福田正夫にも連絡をとった。福田は、当時、東京市外の京王線笹塚駅近くに間借りしていた。

早速、尾崎亮司の許に福田正夫の返事が届いた。昭和二年五月十三日の発信である。

御手紙拝見いたしました。小生ことすっかり御無沙汰してゐます。相変わら

透谷記念碑 (透谷会絵葉書)



文房 承村 藤崎 啓

ずの貧乏暇なしです。どうぞ御許し下さい。

透谷先生の碑のこと。愈々具体化になればうれしいと思います。

就では即刻にでも、お眼にかかりたいのですけど、足に怪我をしまして二三日はまだ出られまいと存じます。なるべくは牧君なども仲間に入れて相談したいので、小生遊びがてら小田原に向くことにいたしましたとも存じますが、一応大兄とおめにかかってからにいた

しませう。(以下略)

牧とは、彫刻家牧雅雄(一八八六〜一九三〇)のことで、

芦子村谷津(現小田原市城山二丁目)の生まれ、十代の後半上京、木彫の修業をし、大正初期、谷津に戻り彫刻に打ちこんでいた。

ところで、尾崎にとつては、透谷記念碑建立を先送りしなければならぬような事件が持ちあがった。

それは、町当局が、第二小学校、町立高等女学校の敷地として、小田原城址二の丸を埋め立てようとする計画であった。

尾崎は、早速、昭和二年(一九二七)十一月、「先づ急を町民諸氏に訴ふ」と題した、お濠埋立反対のピラを小田原保勝会同人の名で、新聞に折り込みをした。

しかし、それでは生ぬるいと、翌年三月二日、お濠埋立反対同盟会を組織して、

昭和四年五月十六日建立

明治元年小田原に生まれ
同 二十七年五月東京に歿す

北村透谷に獻ず

萬物の聲と詩人、情熱、一夕観、雙蝶のわかれ、みみずのうた
精神の自由、内部生命論、富嶽の詩神を思ふ、星夜、蓬萊曲

【碑文筆者 島崎藤村】

その矢面に立った。結局は中途半端な形で、八月十六日、約六カ月にわたる運動を打ち切り、反対同盟会を解散せざるを得なかった。

尾崎は、二つの仕事を同時にこなすような器用さは持ち合わせていなかった。徹底して一つの事に没入する質であった。お濠埋立反対運動期間は、透谷記念碑建立事業は中断されたと見るべきであろう。

さて、記念碑建立の申請を県当局に出したところ許可が降りなかった。

当局は、透谷の思想は危険なものであり、それに透谷の死を不浄なものと見ていた。そのような人物の顕彰碑を建てるなど以ての外である、という訳である。

この時代の出来事を見ると、大正十五年(昭和元年・一九二〇)三月、普通選挙法と引き換えに、治安維持法が

成立している。昭和三年三月十五日には、日本共産黨員、同シンパが全国的に一斉に検挙された。この年の七月一日には、全県警察部に特別高等課いわゆる「特高」が勅令で公布され、思想犯罪に対処する組織が全国に張り巡らされた。

このような時代風潮である。

明治十年代後半自由民権運動に共鳴してもその現実の前に悩みもだえた末、その運動から離れ、超現実的理想の中に、心を托した透谷の思想は、当局には異端としか映らなかった。

生活不如意のなか、近代的我自我と前近代的因習との葛藤にさいなまれ、病氣となり、遂に自ら命を絶った透谷の内面迄立ち至って理解を示す訳はなかった。ただ、意志の弱い軟弱な人物としてか、当局の目にはうつらなかつたのであろう。

尾崎亮司は困った。そこで、局面打開のため、尾崎は、西村隆一を伴い、麻布飯倉に藤村を訪れた。

尾崎は明治九年(一八七六)



竣工した透谷碑 (尾崎正氏所蔵)

右より 青木林太郎・西村隆一・阿部為治・牧雅雄
尾崎亮司・伴野(庭師)・市石(薫職)

生れ、西村は明治三十五年(一九〇三)生まれで、二人は、親と子ほどの年齢の開きがあるが、小田原旅館組合長の尾崎は、若き養生館の当主西村を組合の役員にする程、目をかけている。

西村は、作家宮本百合子や劇作家・美術評論家河野桐谷が親戚という血筋のせいか、養生館に長期滞在の作家・詩人ら文人に接する機会が多かったためか、昭和二年(一九一七)に雑誌『光と文芸』を主宰発行する程の文学青年であった(もつとも雑誌は二号で終刊となっ

た)。

一方、尾崎は、明治二十七年四月発行の『函東会報告誌』第三十六号に、郷土の歴史について「會員諸君の高教を乞う」と質問を出しており、また、同年七月発行の同誌第三十七号「北村門太郎逝く」の追悼文を読んでいると思われる。それに、尾崎は明治三十年代後半、神田で古本屋を営んでおり小田原に戻った後は、『小田原の史実と伝統』の発行を引受けている。

郷土愛の強かった尾崎は、文学と無縁でなく、透谷の

ことをよく知っていたと考えられる。

藤村は、二人から透谷記念碑建立不許可の理由を聞くこと、週日をいれずして泉當局に答申書を書いたに違いない。

当局に提出の答申書と同じものが、藤村から西村の許に送られてきた。日付をみると、昭和三年(一九二八)九月十日とある。

答申書を読むと、当局が建碑を許可しなかった理由が浮かびあがってくる。

尾崎は、その後普通ならば建碑のために献身的に動く筈であるが、この年の秋に脳溢血を起こして倒れた。

再び建碑は遅れた。ようやく病床に起きあがるようになったのは、その年の十一月のことであった。

尾崎は、建碑に当たって、小田原保勝会に代り透谷会を組織した。その時期は明らかではないが、尾崎は、西村隆一、阿部為治、青木林太郎、牧雅雄、福田正夫に実行委員になってもらった。

尾崎は、保勝会その他、足

柄史談会、大正大地震後の

小田原町火災

保険金請求同

盟会や小田原

競馬倶楽部な

どの組織づく

りをしたが、

その後の運営

に責任を担っ

ても、表面で

華々しく名を

売るのは嫌っ

た。透谷会と

同様で、尾

崎は、同志的

結合の形をと

っていた。

※

記念碑は、

小峰の大久保

神社下の崖面

に建てられた。

島藤麟村が方々

探した結果、

相模湾を見下

す小峰の丘が

気に入って選

定した、とも

いわれるが、

西村隆一の話

によると、透

谷の父が旧小

田原藩医の関

係から、初代

答申書

尾崎正氏村

致北村透谷のとりな碑を建てとりと思ふことも、かみ
かみの希望でありまして、小田原の有志及び
出見若子の協力のもととつて、その遺志に相成り
その若出願を承りしところ、透谷遺著の内
容もまた、感念あるやまありまじしと。左は、
透谷の遺著を記す。記すに、透谷の遺著の
内は、

友人であり、彼の没後、その著作を論議し、その
私で取り出す、私から調査の事、ユツツと
へするが順序かと考へらる。左稿の次第か
うして、今回の透谷建碑発起人の一人として、左
簡潔な、意見を申上ります。――
(一)透谷の遺著のうち、「後川村平氏居る、」
「透谷の詩神」と思ふ、其他の遺著小冊子の
内は、
透谷は宗教的かつともいふ、清純な心の詩
人でありまして、その書いともいふ、
透谷の遺著のうち、「後川村平氏居る、」
「透谷の詩神」と思ふ、其他の遺著小冊子の
内は、

もありません。すなはち文同本位であるところから出
発してあります。この点、透谷は、下を、詩神と
くとも思ふますが、彼の「後川村平氏居る」も、
人間本位の立場から、弊習多かりし後川村の平氏
に許して同情と尊敬をもち、なりまします。
透谷は内部の生命と中心に、當時の物質倫理の弊
を慨して、其の遺著小冊子によるの物思を述べ
し、透谷の遺著のうち、「後川村平氏居る、」
「飛空歌」などは、透谷の情思を、透谷の情
へとも、全然内部の産物でありまします。彼も、

年若く、且つ天性純遠にして、世俗のとも拘束せ
らるゝを好まざる性でありまします。透谷の
の發するところ、服世の性でありまします。激情
しかし彼の心の底にも、聖なる信念がありまします。
い情熱もありまします。氣魄もありまします。
透谷として、其の心をも、その心をも、その心をも、
の欠点もありまします。彼の事業も、元々、
「好」を出発し、透谷の心でありまします。透谷が
彼のとりな一基の礎を建て、透谷の心、透谷の
ありまします。透谷の心、透谷の心、透谷の心、

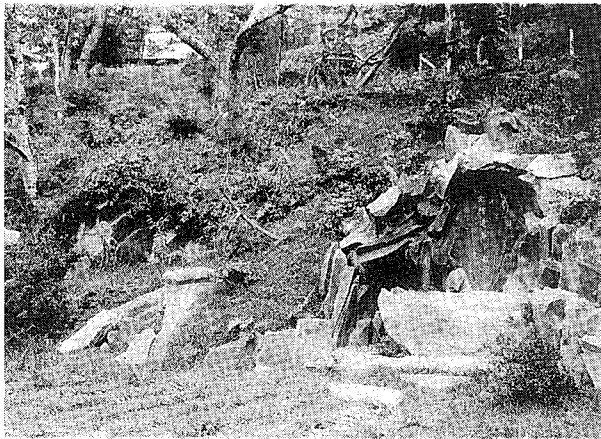
小田原城主大久保忠世公を
祀る大久保神社の場所が選
ばれたという。特に藤村が
捜したということは聞かれ
なかった。

あるいは、場所を最終的
に決定するに当って、尾崎
亮司は、藤村に立ち会って
もらったかも知れない。

記念碑は、北村美那、島
崎藤村らと尾崎亮司を始め
とする人達の拠出を基に建
碑にふみきった。

碑の設計は、牧雅雄の案
によった。石材は、根府川
石が使用され、片浦村(現
小田原市)村長の青木林太

透谷記念碑全景(透谷会絵葉書)



北村透谷記念碑全景

郎が奔走している。

寄金者に配る透谷会発行
の絵葉書を入れる和紙木版
刷りの袋は、製紙場をもつ
大窪村板橋の阿部為次郎が作っ
た。絵葉書に添えた説明書
は福田正夫が書いた。

碑文はすべて島崎藤村の
筆に成っている。

建立の日は昭和四年五月
十六日とある。五月十六日
は、透谷の命日に当たる。

実際に出来上ったのは七月
とされる。尾崎亮司のあと、
小伊勢屋第十七代目を継い
だ尾崎正氏の賞書によると、
六月とある。

亮司は、昭
和四年(一九二五)

七月に除幕式
を実施する予
定でいた。そ
の点、島崎藤
村と北村美那
の亮司宛の葉
書を見れば明
らかである。

ところが、
除幕式は、あ
る事情によっ
て延期せざる
を得なかった。

亮司の目算
は狂った。
そして、昭

和七年夏、亮司は三回目の
発作を起こし病床に着き、

除幕式は更に遅れに遅れた。
除幕式が行われたのは四
年目の昭和八年(一九三三)五
月十六日で、参列者は、尾
崎亮司以下地元の名士十名と、
北村美那と息女の堀越英、
孫の堀越愛子、神官を加え
た十四名で、藤村は都合悪
しく出席できなかった。

※

時移り変わり、透谷記念
碑の周辺の環境が変貌して
しまった。

そこで、透谷没後六十年
忌を期に、碑を小田原城址
二の丸馬屋曲輪近くに移転
する計画が小田原市観光協
会によって進められた。

奇しくも、観光協会理事
は、尾崎亮司のあと小伊勢
屋第十七代目を継いだ尾崎
正氏であった。

昭和二十九年五月十五日
(出)「北村透谷碑移転除幕式
並遺稿伝達式」が、移転成っ
た碑前で、小田原市、教育
委員会、観光協会の共催で
行われた。

式は除幕後、鈴木市長並
に昭和四年建碑の際、協力
した旧小田原保勝会員の小
川量祐氏らの玉串奉典で始
まったが、折柄雨が降り出

したため、会場
を図書館(現市
役所中央連絡所)
の階上に移し、
尾崎正氏の経過
報告、市長の挨拶
があり、次いで
堀越英氏が透谷
の遺稿「富士
山遊の記憶」、
写真四枚、北村
美那宛書翰三通
が市に寄託伝達
された。

また、尾崎正
氏の尽力により、
堀越家より透谷
愛用の文箱一個、
透谷肖像レリー
フ一点、透谷使
用の硯一点、透
谷全集一冊、雑
誌九冊が寄託さ
れた。

なお、昭和四
年透谷碑建設に
関する「建設援助者名簿」
(奉賀帳)のみは、福田正夫
未亡人いし子氏の寄贈によ
るものである。

この外、観光協会では、
透谷遺族と相談の上、東京
芝白金瑞聖寺にある透谷の
墓を、小田原市城山一丁目
高長寺の北村家墓地に改葬

氣のすくまいの精神は、銅板とく考へるが
でありませぬ。

透谷の作品が當り及ぶる後社會の念を興し影
響は、向若き日本に建設といふことをありまし
と。

(二)透谷の死日と就寝

彼の死日は、怪筆の虚報、物質の欠乏、痛苦をよ
りよせしむるに、要するは精神界の智者とて、刀蓋
き矢折れ、罷りて徒止むの心あり、その世を辞し
まつるの、ごとく見えなす。あれは、その遺稿に

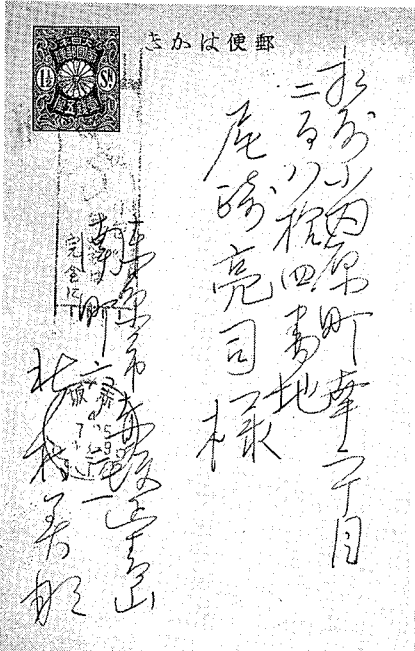
立ちあがり、彼をその世を呪ふべき態度で
すこしし有りませんでし。彼をわらうその世の
めま、踏中堂といふことを覺悟してかたよりの
です。

以上私の言葉は、是れありといふ方があつてもしれ
せんが、私達も前記のやうな心持から、せめて記念
の石一つありといふの地ある小田原の形勝好
地を思ひて、明治の文學史を飾る足るべき
是の透谷の事業を思ひて、思ふの心あ
りませぬ。

昭和五年 九月十日

すること、透谷誕生家跡
に「北村透谷生誕の地」の
碑を建立する事業を行うに
当り、尾崎正氏も骨を折ら
れた。

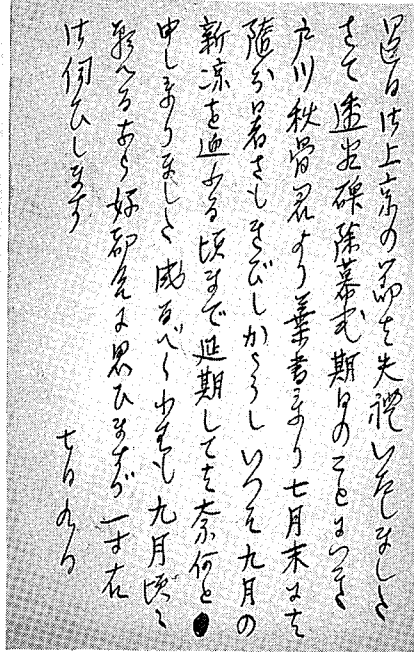
(透谷碑移転については、故
中野敬次郎氏の「北村透谷遺
品の寄託経過についての覚書」
を引用させていただいた)



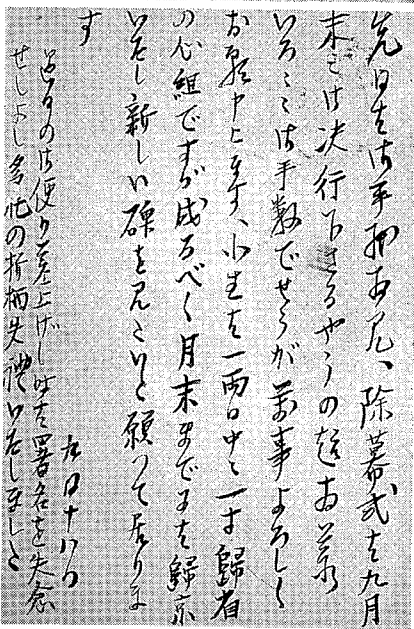
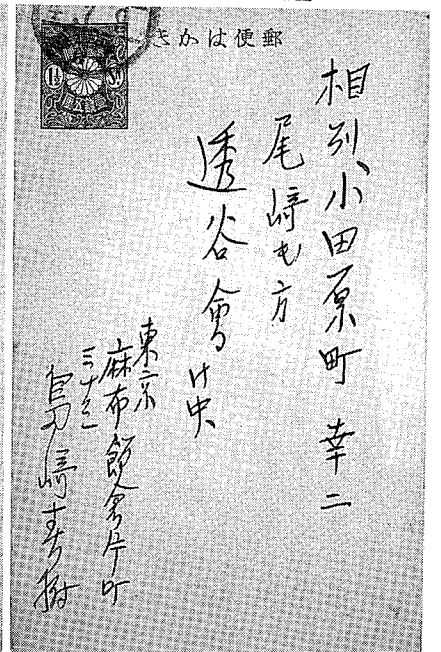
昭和四年七月九日付
島崎藤村書簡



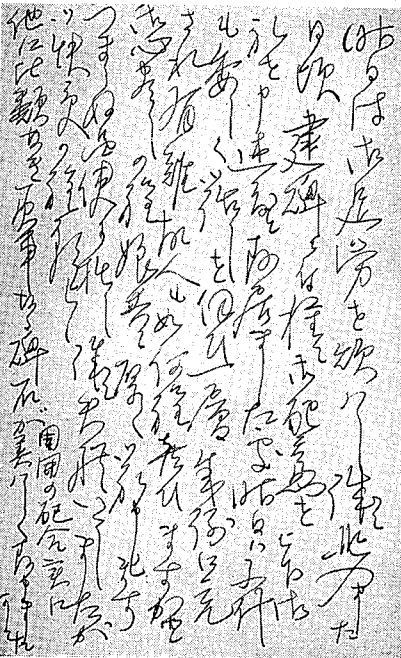
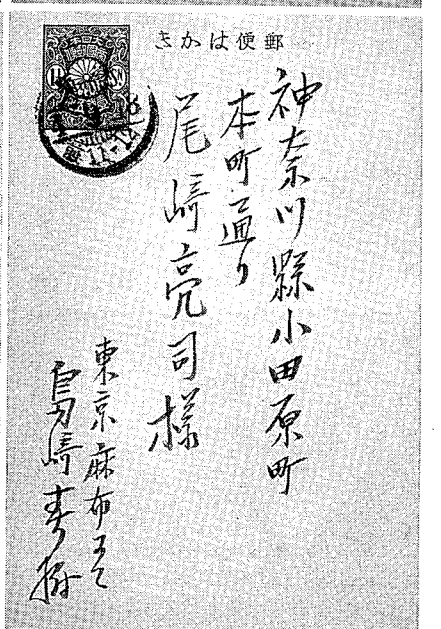
小峯公園 (現競輪場)
透谷記念碑より相模湾
を望む (透谷会絵葉書)



七月九日



九月十八日



昭和四年九月十八日付
島崎藤村書簡

昭和四年七月二十五日付

北村美那書簡

(いずれも尾崎正氏所蔵)

漫言一則

北村透谷

『函東会報告誌』第二十三号所載
明治二十五年四月発行

われかつて徒然草を讀みける時撰みて持つべき友の中に病ひある人を數へたり。いかにも奥ゆかしき悟りきつたる言葉と思ひて友にも語りける事ありけり。然るに頃者米國の宣教師某を訪ひたる時其卓上に日常の誠めを記せるを見る。其中に言へる事あり病ある人を友として親しむ可からずと。われ曾つて英人なる宣教師某と相携へて花を艶陽(晩春の季節)の中ばに觀る。わが花を賞するの心はわが時を惜む情より多かりければ花王樹下に行立する事稍しばらくせり。某即ち怪ん

で曰く何事の面白きぞ。余曰くこの花の面白からずと思はるゝ所ありやわれはこの花に對して魂魄既に花心にありと言ひけるに驚いて再び曰ふさてもさても日本は風趣に富める國かな。われら實際的の國民なる英人に取りては兎ても花の下に終日浮かれぞめこの興を貧ることは覺束なしと。

偶然の事なれども以て東西人心の異なるを知るに足るべし。われは花なき邦に生れて富める人とならんよりも花ある邦に生れて貧しき世を送らん事を樂しむ。

北村美那の書簡

読み下し

(11ページ)

昨日は御足労を煩わし誠に恐入りました。日頃建碑に付様々ご配慮を被下御礼を申述度と存居ました處昨日は不計も委しく御話を伺ひ一層感謝に充され有難故人も如何程喜ひますかと御心尽しの程娘共々厚く御礼申上げますつまらぬ品使に托し誠に失礼いたしましたが御快受の程願上度。他に比類なき美事なる碑石が周囲の配合実に美はしく存申しました。

かしこ

北村美那の透谷碑除幕式の礼状

北村美那 謹言

保勝会長

お急ぎで御座います。昨日は、お忙しい中、お時間を取って、お話を伺い、誠にありがとうございました。お返事は、後ほどさせていただきます。お礼状は、後ほどさせていただきます。お返事は、後ほどさせていただきます。お礼状は、後ほどさせていただきます。

読み下し

拝啓 益々御清祥賀し申上候さて今回透谷碑除幕式に就ては何くれとなく身を以て直接指導被下。如此盛大なる挙式の運びに至れるは偏に貴臺を始め諸氏御熱情の結晶と厚く御礼申上候透谷も定めし地下にて喜び居ること存じ候尚他の方々

へも御挨拶状差上べきの處何卒貴臺より宜敷御伝へ下され度候先ハ不取敢御礼迄如此に御座候 敬白
五月十八日
北村美那

保勝会長 尾崎亮司様

保勝会長
尾崎亮司様
北村美那



丸山古香(透谷の実弟)が描いた長泉寺(小田原市前川)の杉戸

小田原叢談(六)

石井富之助

だるま・けんやき・むかでだこ

小田原ではむかしは五月の端午の節句にたこを揚げた。

そのころ東京ではたこ揚げは正月のものであったらしく、幼年の友、幼年クラブ、少年クラブそのほかどの雑誌をみても、みんな新年号にたこ揚げの口絵がのってお正月に揚げないのだからと子供心に不思議に感じたものであった。

ちょっとたこのことを調べてみると、たこの歴史は非常に古い。中国では、漢の高祖の時韓信が敵状偵察用に使ったのがその起源だといわれているし、日本では承平年中(九三〇〜三三)に作られた『和名抄』という本の中に出てくる。たこを揚げる季節はなにも正月に限ったことではなく、風さえ吹いてくれればいつでも

出てきたが——、いろんなたこが、やや風波きみの海をうしろにして、さつき晴れの空に高く低く、遠く近く揚がっている。それを見て、今度海へ来る時にはたこを持ってこようとおもったり、海の近くの子はいいなとうらやましがったりしたものであった。

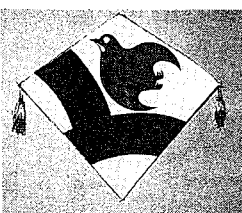
西沢笛歌著『日本玩具事典』の中の「小田原のだるまだこ」には

小田原には珍しいたこの種類がある。長崎だこのヒントを受けて作った「けんやき」と呼ぶひし形の両側を切り落としたものや「むかでだこ」のような奇抜なものもある。「だるま」だけはその形を巧みに利用してあるところに一つの特色がある。

と書いてある。小田原だけのたこしか知らないわたしたちにはわからないが、全国のたこを研究している著者が珍しいといっているのだから、やはり郷土玩具として独特のものであったといつてよいのであるろう。

けんやきの糸のつりはまんなかに二本しかないので、

そこへ行くと角だこやだるまだこは高い空にジューツと安定し、ブーンとうなりを響かせて——動いたとしてもおおおようで、さすがに貫禄があった。糸の切りっこももちろんやった。わたしはやったことがないのでどうやって糸をつよくし、相手の糸を切るのにどんな仕かけをしたのか知らない。長崎ではビードロ引といってガラスの粉を糸に引いて切れないようにした。江戸



長崎 けんやきの原形

つりあいをとるのがなかなかむずかしい。両側にふさをつけてつりあいをとるのだが、それがとても微妙で、どうやら揚がったと思っっているうちに、ちょっとした加減で横さまにサーッと落ちてくる。そのたびにふさをつけて調子をとる。そういう苦心をするのでうまく揚がった時のうれしさは格別であった。両袖を振っているみたいで、ほんとにひょうきんなたこであった。

では木切れをけずり、刃物を植えた雁木をつけて、それで相手の糸を切るなどいろいろ工夫をしたといわれているが、小田原のも多分そんなところだったであろう。

むかでは竹で円い輪をいくつも作り、それを間隔を置いて糸でつなぎ、その上に紙をはったもので、揚げると長い胴体を空中におよがせる。まったく奇妙キテレツなたこであった。当時でもそんなにたくさんは揚げていなかった。これはいくら口で説明してもわかってもらえそうもない。幸いなことに俳句の佐倉東郊さんがむかでの骨だけのものを郷土文化館に寄贈してくれた。同館へ行けば多分見ることができるとであろう。

(続)



だるま 風

三月十日

東京大空襲を顧みて(七)

三月十日以後のこと

三月十日の空襲で、当時東京市水道局からの水道管が爆撃によって破壊され、私たちが独立高射砲第一大隊には水がなくなりました。

仕方なく荷馬車で運ばれた。まず、炊事に使う水が優先し、食事時のお茶は湯呑一杯に制限された。中隊単位の風呂は、二日に一回の割に取替えるが、百二十人も入るので、汚れを洗うというよりは沈むだけだった。洗濯は水が使用できなかった。それで埋め立てたばかりの陣地の一隅に穴を掘り、出てきた水を利用した。塩水ではあるが砂で濾過され塩分は少なくなっていた。洗濯物は、太陽があるうちはよいが、沈んでしまふと、はじめめるので早く入れなければならなかった。

五月に入ると、私は特別

松本巽

外泊が許可され、家に帰った。

その夜B29が家の上空を通過した。どこを爆撃したか、早朝ラジオをかけたなら横浜だった。隊より中隊にすぐ戻れという電報が入った。

すぐさま電車に乗ったが小田原駅迄来ると東海道線が不通である。小田急で新宿を経由して戻った。

照準手は、初年兵では駄目だ、やはり馴れていないということ、私は戻されたのである。以後、私には外泊は無かった。

空襲は、四月頃より地方都市に移っていった。東京防空隊も地方都市に分散された。私たちが独立高射砲第一大隊からは第三中隊が新潟へ移駐していった。

その中隊の跡には、木材で作られた高射砲の模造が置かれたのである。他の中隊の砲身は、B29の進行方

向を向いているのに、木造の砲身は一定方向を向いて動かない。

羽田飛行場は、十号陣地で良く見え、木製の飛行機が滑走路に並べられていたがB29が来ても飛びたない。B29が上空から見れば、模型であることがわかるものであろうに……。

楠木正成の千早城の真似をして近代戦争には何んの役にもたためもの、と思えてならなかった。

六月頃、公用外出をした兵隊が市民から聞いた話では、日本の敗戦の噂がささやかれるようになった、とのことであった。私が保存している軍隊手牒の履歴欄の末尾には次のように記されている。

○昭和二十年七月十日陸
亜密第五〇〇號ニ依り
晴第一九〇四部隊に轉
属○同日折口隊ニ配属

転属した形をとっているが、私は、十号陣地にそのままで、中隊長以下の顔ぶれは、全く変わっていない。未だに、その訳が分からない。

八月に入り、六日広島、

九日長崎への原子爆弾(當時軍では特殊爆弾といっていた)投下によって甚大なる被害を受け、国民は勿論、軍隊もその噂を信ずるようになっていた。

八月十日頃だったと思う、師団指令部よりの情報として、八月十二日頃、東京に原子爆弾が投下されると、伝えられた。私たち防空隊はそれに備えて訓練と演習が行われた。

演習といっても、原子爆弾を積んだ飛行機は一機であるので、東京湾の海中に撃墜するのは、実際にはなかなか難しい事である。

しかし、昭和二十年八月十五日、天皇陛下下のラジオ放送により長い戦争は敗戦となり終結した。

天皇陛下下の放送は、始め本土決戦に備へ、米軍上陸予想地点に兵が集結していたので、軍や国民への激励かと思つた。意外なことであつた。敗れて口惜しさがこみあげてきた。

アメリカが本当に東京へ原子爆弾を投下する積りであつたかどうか判らないがすでに予定していたとしても、アメリカ側は、十二日頃、日本の降伏は間近と予

測していたかも知れない。

一部将校の命令により抵抗するところもあつた。川崎方面に布陣していた高射砲部隊は、終戦翌日の八月十六日、偵察のため飛来してきたB29に対して、散発的に発射したのが見えた。

勿論撃墜する事はなかった。しかし、日が経つにつれ次第に沈静化し、敗戦の事実は、軍も国民も心に深く刻まれていった。

月島国民学校講堂に貯蔵してあつた、米や小麦粉等の食糧や被服を米軍に没収されてはいけなないと、中隊全員で浜町公園に移すことになった。

食糧はかなりの数量にのぼつた。米は千五百俵ぐらゐはあつたと思う。一俵は四斗で六十kgだ。当時、戦争はいつ迄続くか判らないため、兵隊の食事は、米が一食湯呑茶碗一杯ほどであつた。大雑把な計算だが、貯蔵米は、中隊全員(約百二十名)を数年間養えた分量である。

私は、食糧運搬の班で、米をトラックで国民学校から公園迄運搬したが、米軍が没収などする訳がない、そんな事をしなくても、市

民に放出してやればよいと思っていた。

そんな考えでいたので、私は一台のトラックの責任者であったのを幸いに、途中市民が集まっている所へ二、三俵ずつ落とすとしていた。

米俵を公園に降ろし終えても、荷台には相当の米粒が残っている。俵を縛る縄がゆるんでいるためだった。運びに戻る度ごとに、途中トラックを止め、市民に入物を持ってきてもらい、荷台に残った米を掃いて入れてやった。貰った人は、塵と分けるのに大変だったと思ったが、それ程、市民にとって米は貴重なものだった。こうした私達の行為は、市民特に月島付近の人たちには喜ばれた。

被服を運搬した兵隊で東京に実家がある人は、月島付近の人家に預け、復員するときは持ち帰ったようである。

九月二日、米軍通信隊が月島付近に進駐してきた。軍隊手牒の履歴欄の最後には、「八月三十一日復員下令」とあるが、私たち部隊が実際に武装解除され復員したのは、九月上旬の事で

あった。

馬を使って、隊に水、食糧を運搬していた兵隊は、その馬と荷車を引いて、炊事場にあった米、塩等を積んで帰っていった。また、部隊で使っていたリヤカーを引いて千葉まで帰ったのは、初年兵を大事にした先任の板倉上等兵だった。

中隊では、高射砲を米軍に引き渡したり、その他残務整理するために、中隊で十名ほど残った。私もその一人であった。

十号陣地に据え付けられていた高射砲は、復員前中隊全員で分解、月島の道路まで運び出し再び組み立てて並べられたが、私たち残務整理のため残った兵隊が交替で歩哨に立ち、その見張りに当たった。

月島国民学校講堂に残された米約百俵、小麦粉約百俵ほどの食糧も、交替で番をしたものの、東京在住の復員者がかわるがわるリヤカーで取りきたのをそのまま見逃していたので、間もなく無くなっていた。

被服は全部、浜町の公園に運ばれ、広場にシートをかけて置かれたが、戦後のどさくさでどうなったか？

浅草観音さんのヤミ市でよく売られていた軍服などはどうして仕入れたのか疑問である。

独立高射砲大隊長は中佐であった。戦争中は、兵隊は口もきけない程偉い雲の上の人だったが、戦争後は私達残務整理者のいる隊に入ってきた。戦争中は当番兵が付き、食事を運んでものだが、終戦後は誰も運ぶのに運んでやった。

元大隊長は、私より先に復員する事になったが、その折に

「松本は家に帰ったら何をやる？」と問いかけてきた。私は農業だということ、

「いいなあ、俺は職業が無いのだ」と、淋し気な顔をしていて、気の毒な思いがした。

その後、米軍に引渡す手筈が遅れ、中隊で三名ずつ残った。

私が復員できたのは、昭和二十年十一月下旬の事だった。

軍衣をまとった復員姿で元十号陣地から有楽町駅まで来る途中で、ビルの窓や家の玄関先で、「兵隊さんどこから帰って来たの」と声をかけられた。おそらく父を、夫を、子を、兄を、弟を、いつ帰ってくるか待っていた肉親たちであつたらう。

入隊して約二年六カ月の軍隊生活であった。振り返ってみれば、苦しさもあり懐かしさもある、過ぎし青春の一駒である。

後日譚

昭和六十年十月、東京都港湾局開発部より一通の文書が舞い込んだ。

昭和二十年三月十日の東京大空襲の戦災犠牲者及び撃墜したB29搭乗員の遺体と仮埋葬をした場所の照会であった。

早速、回答をした事はいう迄もない。

三月十日の空襲で火焰にあぶられ、川に飛び込み亡くなった市民の遺体が海に流れ、十号陣地の浜辺に漂着したのは、五月頃迄続いたと、前号で記した。

昭和60年(1985年)

有明埋め立て地の遺骨

都が発掘調査へ

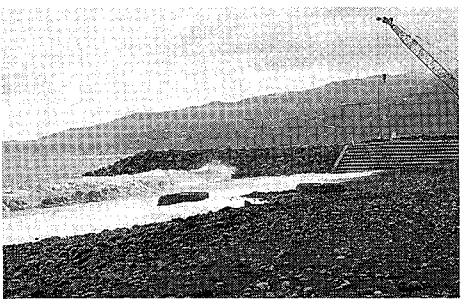
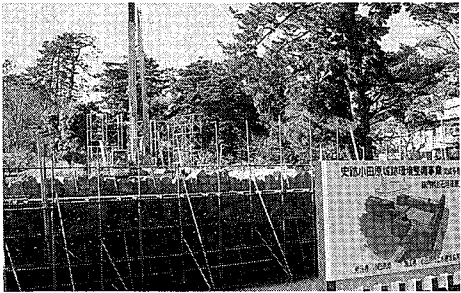
東京都江東区有明の埋め立て地に「東京大空襲」の犠牲者約百人が発掘された遺骨。埋め立て地の再開発などを行うにあたって、都は発掘調査を進める方針を決めた。九月上旬には発掘作業が完了した。

有明埋め立て地の遺骨は、埋め立て地を埋め立てた際に、埋め立て地の底に落ちていた。埋め立て地の底には、埋め立てた土や石が積み重なっており、遺骨は土や石の下に埋もれていた。発掘作業は、埋め立て地の底を掘り進め、遺骨を発見した。発掘された遺骨は、埋め立て地の底に落ちていた。埋め立て地の底には、埋め立てた土や石が積み重なっており、遺骨は土や石の下に埋もれていた。発掘作業は、埋め立て地の底を掘り進め、遺骨を発見した。

有明埋め立て地の遺骨は、埋め立て地を埋め立てた際に、埋め立て地の底に落ちていた。埋め立て地の底には、埋め立てた土や石が積み重なっており、遺骨は土や石の下に埋もれていた。発掘作業は、埋め立て地の底を掘り進め、遺骨を発見した。

東京都港湾局よりの問合せ

護柩
 秋冷の候、益々、諸君の心とおもひより、お慰み申す事、
 こそ、突然、かつ古くは、大空襲終結、このころ、
 目下、東京都におき、昭和二十三年三月十日、東京
 大空襲の戦災犠牲者及び撃墜したB29乗員の
 遺体の十号陣地(現、江東区有明町)に埋葬
 せん、情報も、さう、遺体、及び、収容、行方、
 犠牲者の遺骨、宛、なく、調査、せ、情報、さ、
 困窮、お、
 つ、
 了、
 一、
 標、
 昭和二十三年十月四日
 敬具
 東京都小田原市本町地先
 東武東上線沿線
 建設部長 杉川 徹
 建設部長 杉川 徹
 内線 三三三三三



海岸工事中
 平成5年度
 小田原海岸防砂堤整備工事(県単)
 区間 小田原市本町地先
 期間 平成5年9月30日から
 平成6年3月15日まで
 施工 東亜建設工業株式会社
 神奈川県西部漁港事務所

十号陣地で埋葬した遺体は百五十体ぐらいであった。その中には、高射砲で撃墜したB29搭乗員の遺体が十体ぐらい含まれていた。兵隊の中にいた僧侶の読経により懇ろに埋葬したことも前号で述べた通りだ。この埋葬の件については、戦後ずうっと軍機のペールに包まれ忘れられたままになっていた。東京都では、各証言が一致したので、翌六十一年中に発掘して、遺骨は、都の納骨堂に安置されたと聞いていた。私が現地を訪れたのは、平成三年九月十五日のことだった。四十六年ぶりである。驚いた。十号陣地の周りは海だったのに……。それが皆埋め立てられ、海上公園として色々の施設が出来ていて、当時は遠くに見えた「第三お台場」や

「第六お台場」も陸続きとなり、海の真中だった所が埋め立てられ、船の科学館が設けられている。当時埋め立てられたばかりの十号陣地の波打ちぎわは、ハマグリ、アサリが澤山生息していたので、空襲の合間を見ては兵隊が交代で取りに行き、大隊の炊事場に持ちこんだ。食糧難の時代である。味噌汁の具としては最高のものであった。その浜辺は、今はなく、コンクリートで固められていて、昔の面影は全くない。その時世の移り変わりに感慨無量なものがある。しかし、かつての風景は失われていても、我々世代は、「お国のため」と、自分を忘れ、青春のエネルギーを精いっぱい燃焼させた事は、私たちの記憶からうち消せない。そして、痛恨に堪えないのは三月十日(旧陸軍記念

日)の東京大空襲の事である。この空襲で、いち早くB29を捕捉し、その低空侵入を待ち受け、高射砲の威力を發揮し、敵に大きな損害を与えていたならば、十万人余という数多くの犠牲者を出さずに済み、その後の日本本土の空襲の被害も最小限に留めることが出来ただろうと思えば残念な事である。いつしか、戦災犠牲者を仮埋葬した場所に向かっていた。十号陣地だった所は有明テニスの森公園となっているが、埋葬場所は、死者の魂がそうさせたのか、何の施設も出来ていなかった。込み上げてくる心のうずきにはどうしようもなかった。今はただ、戦災犠牲者が安らかに眠るようにご冥福を祈るのみである。(了)

- ① 小田原城跡銅門復元工事
- ② ③ 小田原御幸浜より
- や、西寄りの海岸防砂堤工事

虜囚記②

ラーダ・ラーゲル

ソ連タンポフ州

モスコイ東南四九五km

文と絵 藤野

明

満州の牡丹江から貨車に詰められ

て二十九日目、雪の中に降ろされた

所がモスコイ近郊のラーダと云うラー

ゲル(収容所)であった。

独ソ戦で三千名の捕虜が此のラー

ゲルで栄養失調の為に死んで行った

魔の収容所だと云う。

所内には絵の様な松、白樺、ナラ

の木々が大背を伸ばし林をなしてい

る。

四月初旬とは云え、未だ新緑もな

く残冬と云った表現が当るかも知れ

ない。

半土窟のバラック、之が我々のホー

ムである。地下に一・五米位埋まっ

ているのと、屋根が土で覆ってある

関係上、ジメジメと陰鬱に包まれ、

薄暗さが手傳い、狸穴の様である。

丸太と床板とで組まれた中の造作

は埃っぽく、夜具棚の様な棚が二段

三段に成っており、バラックの大小

により、二〇〇〜三〇〇人がギッシ

リ詰め込まれている雑居生活。こん

なバラックが所内に一五〇位あった。

ゲルマン、ハンガリー、ルーマニア、

オランダ、ベルギーその他フランス、

デンマーク等、他国の敗戦将兵が三、

〇〇〇人位入り混っている。

困窮と病魔を乗り越え、生き抜か

んとする人達の闘いの場でもあった。

(続)



筆者がソ連から持ち帰ったスケッチ

遺稿

露国・日露の役俘虜のこと

八十七年ぶりのお礼前編(六)

隠岐威重

大黒屋光太夫

次に有名な大黒屋光太夫(七五〇〜一八二〇)のことに触れよう。光太夫は、前記の者達に比べて学識、見識、経験がはるかに勝る人物のようだ。

伊勢から江戸に向う航海の途中嵐に会い仲間と共にカムチャッカに漂着した。途中多くの困難に出会い仲間を減らしながらイルクーツクに着く。そこで国立航海学校付属日本語学校に一時留まる。シベリアの中央、バイカル湖畔に創立された航海学校。それは海岸を巡る技術を学ぶ学校なのだ。

バイカル湖が如何に大きくても海岸とは別だ。その内陸の湖に、海洋向けの航海技術を教える学校を創らざるをえない露国の苦悩の中に、逆にユーモアも感じる。後で分る事だが、この航海学校では外洋に適する

士官は殆ど養成出来なかつたとか。

でも、光太夫はイルクーツクに留まる。そこで幸い、欧露から来た学者、知識人の友を沢山得た。その中に特に太夫に好意を持つ探検家且つ地理・生物学者のラクスマンは、光太夫の切なる帰国の願いを知り、女帝に嘆願の道を開いて、露都に行かせてくれた。

光太夫は都で女帝エカテリーナに拝謁を許され、同情、優遇され、帰国の許しも得て、再びイルクーツクに戻り後帰国する。光太夫の帰国には露国側は苦勞した。船を操る士官がいないのだ。当地の航海学校の実績はそんなものだった。止むを得ず古手の陸軍中佐を起用、お茶を濁した。

露国側からみればその帰国は日本開国の使いになるのだ。交渉の使いを陸軍中尉アダム・ラクスマンと云



う。彼は光太夫をイルクーツクから都に行く道を開いてくれた学者ラクスマンの息子である。何か奇縁の糸が絡んでいるようだ。

光太夫の帰国後の幕府の処遇は冷たかった。貴重な中々知ることの出来ない露国や欧亜の状況に関わる報告書を提出させた後、江戸の菓草園での隔離生活を死ぬまで強いた。鎖国の壁の厚さを知らされる思いだ。

露国での厚遇、たとえ、シベリアの食料補給解決のために、日本に開国を求めた下地であったとしても、凍てつくシベリアの森林を往く馬糧の苦難を経て帰国した漂流者への処遇は少しく厳し過ぎるようだ。

「日本から漂流者があれば都市に伴え」のピ皇帝の命令。その方針が歴世に引

き継がれたこと。日本語学校を設け、その国の言葉、風俗習慣を学ぶと云う、日本人から見ればやや、迂遠な道をとることも、基礎から積み上げる西欧の科学思想が、最早当時の露国の政策の根底にあると感じられる。

唯、若し開国が出来、交易が始まった場合、露国側からの主要輸出品が黒貂に代表される毛皮ですべて可なりと一途に思い込んでいる事はいささか滑稽だが。マーケット・サーベ不足と云う事か。

さて、このような露国の行動に対して、幕府の憂国の士、知識人達はどのよう

に反応したか。北辺は騒がしくなっている。日本国内の世論、江戸期の北方への恐怖が湧く。アトウラソフのカムチャツカ進出、占領。その南下の千島探検がそれに続く。

赤蝦夷の海のゴザック、ウルップ(得撫)島まで侵入し基地を開きラッコを獲っていた。クルーゼンシュテルンの露国としての第一回の世界周航。その船に乗る

国使の、露米会社の実力者レザノフ。彼の暴挙、開港条約の失敗、その腹いせで樺太の幕府屯所の焼き討ち事件。クルーゼンの周航日誌の素早い翻訳……オランダ書より邦訳……による欧露への知識を開かせていった。

続くゴローニン・リコルトの周航で択捉島でのゴローニン捕縛事件、その返礼の高田屋嘉兵衛の逮捕等々。大黒屋光太夫の帰国、その報告書で露国の状況、またその求める物の内容がほぼ判明。松前藩の酷政、原住民アイヌからの掠奪政策の判明、それによる松前藩の國替え、蝦夷地の幕府直轄管理等々、と北辺は非常に騒がしくなってきた。

先駆者・工藤平助

その時代の江戸幕府の憂士の北方に対する考え方、知識、行動について少しく触れよう。栄螺が殻を閉じるように、国を閉ざしていた日本、僅かに長崎に港を開き、その港の狭い隙間から流れてくる国外の情報、それが鎖国の姿かと思えるが、それは違っていた。外国の知識、情報の不足

の飢えの落差は、その狭い隙間を押し開いて、音もなく多量に国内に流れ込んでいたのだ。

対露国だけについても、クルーゼンシュテルンが記した周航記が西欧諸国で読まれ、その評判が上がると、数年を経ず邦訳され、知識人の間に広く読まれていた。ゴロニン・リコルドの『日本幽囚記』に就いても同様であった。

また、こんな見方もある。九州の長崎での鎖国管理は厳しいものだったが、北方蝦夷地については房俵けだった。頭隠して尻隠さずと云うことか。北の情報は多くの有志の耳に目に入っていたのだ。

その先駆者、工藤平助(二言語)(一〇〇)に少しく触れる。平助は紀州藩藩医の子として生まれ、後仙台藩医の家に養子として入る。医者と云う人体との即物的な関係を持つ業の為か、彼の思考は自然科学に近かった。『蕃語考』の青木昆陽に師事した。昆陽の師は京都の伊藤東涯である。すなわち荻生徂来と並ぶ古文辞学派

の巨頭である。彼等は幕府の農本主義による秩序を守る考えとしての朱子学(儒教)を否定した。政治理念を町人等の操る商品経済、物を客観的に量る、その物の本質を知ると同時に物と物との相関性を知ると云う科学的な近代思想を抱いていた。昆陽の『蕃語考』も人口問題と飢饉を論じたものだ。兵助も独断性を重んじ自ら機械を創ったりした。藩医から藩の財務官に転じ、より実務に近づいていった。藩も平助の才を認め、江戸の町住まいを許し禄のみを与え、自由に有志と交わる事を認め平助の思考のみを求めた。

平助の考えでは我が国を次のように把握していた。我国の骨格は松前、大坂、長崎から成ると。長崎からは思考、北の国松前から鍊を求め干乾にし肥料とし、それを大坂(その近域)で綿、木綿として全国に衣料として配ると云う経済を興す発振地の考えだ。

林子平の『海国兵談』も平助に触発された物、また面白いことには、高山彦九郎を嫌うことだ。虚空な論を弁ずるロマンチストを嫌う点だ。

現地派の最上徳内(南部藩出身の下级幕吏)による千島探検、間宮林蔵の樺大探検、間宮海峡の発見もその触発による。

十一人子を成しさらに乱れ髪 与謝野晶子は鉄幹との間に十一人の子をもうけた。しかるに夫婦で仏蘭西へも遊学した。その上濃艶な歌集「乱れ髪」の上梓は当時の歌壇に大きな反響を与えた。才女と言はんより女傑と言ふべきである。やわ肌の熱き血汐にふれもせで さみしからずや道を説く君 なお真鶴岬には晶子の次の歌の歌碑がある。



ある。

わが立てる真鶴岬が二つにす 相模の海と伊豆の白波

透谷の嘆きは生まれが早や過ぎた

今年北村透谷が没してから百年にあたる。彼の明治文学における輝かしい業績にもかかわらず、惨たんたるその生涯は傷ましい限りである。もう五十年いや二十年でも遅く生れていたら必ず、小田原出身の文豪、大思想家になっていたであろうに……。

白秋はあわて床屋で髭を剃り

天神山の木兎の家に棲んだ北原白秋は、時折り十字町の理髪店で整髪した。顔いちめんにシャボンの泡、睡くなるような鉄の音、そこで「朝も早よからチョッキンナ」の童謡「あわて床屋」が出来た。ちなみに彼のたくさんの童謡の多くは小田原で作ったと言われる。

小田原 総会のお知らせ

史談会 総会のお知らせ
次により総会を開きますので、皆様のご出席をお待ちしております。
日時 平成六年四月二十三日(土)一時より
場所 小田原市立郷土文化館

総会議事 予算・決算・役員改選など
講演 「相模川と酒匂川流域の古墳群」
講師 小田原市文化財保護員長 杉山博久先生
古墳発掘を多数手掛かられている先生は、判り易く興味深くお話しされます。

明治の風流人

横山清男の旅日記

『熱海の藻屑』(五)

佐久間 俊治

四月二十八日

朝まだき(早く)よりおき出でて浴して寿衛子は髪くしけずり、浴して旅のきぬ(着物)をきて、やどりを立ち出でんとしけるおりふし、空うちくもり小雨ふり出だしければ、東京をいでたちし時とおなじく、しばしたゆたい、まど押しあけて幾度か空をながめたるに、今やはれなんと思えばまたふりいだし、はては大兩となりぬれば、また今宵もここに明かすこととして楠衛子に送る文に熱海温泉(昭和初期)



春雨にいでたつ人のあしまでもとどめてぞふる旅やかたかな

やどのあるじ賢三いできたりて、予がきのう隣の家の國寶と銘ある刀とりよせありしこと、またこのやどの肥前國忠吉の刀のことなどこれかれとものがたりして去りし後、常にかこの家にも売りに來たる古屋といえる男來たりて画をこうまに、三ひら四ひらいつものがまを描きて日は暮れたり。やどりへも短冊に歌を寿衛子とともにかき、また、がまもえがきておきぬ。

同二十九日

とくおきて見れば、空もようように晴れ行き、きょうこそはとてものをとりまとめて、これかれへ(あちらこちらへ)のこと、はやとくたのみおく。

旅人のあしをとどめてふる雨もおもいもはれてたちいずるかな
午前七時三十分やどりをいず。ものを奴にもたせて、賢三、母もろとも見送りて、母は門辺に別れ、賢三

は停車場に別れて、やがて車は押しはじめぬ。早きこととし。

おもしろく磯うつなみをあとに見て

はや伊豆山の停車場につく。

都へといそぐ心はくるまさえはやくもここはいず(伊豆と出ず)山のさと

海岸のけわしき谷の上や岩石の間に石垣をつきたて、また木をもと心ねるといふものの如きものを造りて、そが(その)中に鉄道をしき、かたえは山きし、かたえははるかに見おろす磯辺にて、ひとたび車の道を行きあやまりたらんには、たちまちもくずともなるべしと、誰も心ほそくおもほえり。

磯山のきしをめぐりし車道
人のむねにもなみうたせ(心をどきどきさせる)けり

小田原につきて、ひるげとこのえ、車にものをせて馬車停車場にいたれば、いまし下等馬車のいずる折なれば中等はしばしまつべしとて、休所に入りしおり、人力車夫のすすめにこれにのるもまた心よかるべしとてのる。この馬車鉄道はわかしの東海道の駅路なれば、

くろがねの道ひらけても駅路は車を馬にひかせけるかな

国府津につく。汽車の時刻はやければ、停車場前の休茶屋に入る。さきに人車にあいのりせし横浜の人とくここに來たりしとて、ともども四方山のものがたりしてあれば、汽車のきしかう音におどろき、赤帽子きたる男にものをたせ、切符をかき、ともに乗りて出ず。汽車はとくはせて平塚につく。予は土方久規をなんこの別荘にとい、それより江の島、鎌倉をへてかえらばやとて汽車をおり立ちて出口にいたれば、のりつき(途中下車して別の汽車に乗ることか)はならぬとて、またもとの室にかえるもほいなし(残念である)。前の道づれ(前の席の同行者)に、そのものがたりして、後日また別にものせんといければ、この人も、きょうは空もようおもしろからず、後日はれわたたりたる日をえらびていたつこそたのしけれとねもごろにいなぐさめけり。とかくするうち、横浜につき、道づれの人は別れて汽車をおり立ちて行く。後に乗合のあまたあれども、またものいふべき人もなく、寿衛子とならびてはしる車の窓より名残りの花のちらちら見ゆるもおかし。

おしなべてなごりおしくも行く
春を

とどめもあえず(とめることもできないで)ちる桜かな

汽車の停車場にしばしとどまるほども、今ははや都へところいそがれて何ゆえにおそかりしとおもつてもわれながらおろかなるべし。

烟立てはしる車もかえるぞ(坐(場面)はなおはやかれとおもいやるかな

この歌、前にしるす伊豆山の歌と表と裏のけじめあるは、いづ山はいまだ熱海の名残りあれば、はやしとおもいつれど、こは都に近づきたればひたぶる(ひたすら)に心せかれたるをいなしたり。午後六時頃新橋につく。ものをたさえて牛肉店にいり、寿衛子と夕かれいしおえて人力車にのり、道すがら、こし(来た)道をおもえば、車にのみ乗りし

も(車にばかり乗ったのも)ひらけ行く(発展して行く)世なるべし。

押しつ引き馬の車や湯けぶりもみな世の人のたづき(生活の手段)なりけり

午後七時ころ、番丁の家にかえりて、岡本重信、曾田等来たりて四方山のもがたりして夜も更けぬれば、衾にいりて今宵は二人ともに我ものがおしてのどけき夢を結びけり。

春の日の熱海のもくずもしお草か(搔・書)きあつめたるわれのち(下手な)文

翠園主人
しるす⑩

「解説」

今から六、七年前、母高子から、和



横山清男画

紙に見事な筆でぎっしり書かれた、厚さ一・五センチくらいの和とじの自家本を見せられた。母のまたいと

ここに当る吉松須賀根氏が、その祖父横山清男氏の遺作として大切に保管しているものを借りたものだという。面白そうだとは思ったがほとんど読めないの、その時はすぐ返した。

一昨年はまたその一部『あたみのもくず』のコピーを見せられた。『くずし字解説辞典』などをたよりに少し読んでみると面白く、とにかく百年近い昔が、限られた範囲ながら生き生きとつたわって来るではないか。ひとつ本腰を入れて読んでみようと思った。それには周辺情報もほしいと思つたが須賀根氏は平成二年に亡くなり、その夫人武子さんを母とともに鎌倉に訪ねたがこの人も平成四年の春に亡くなったという。

須賀根氏の子息吉松信彦氏(つまり著者横山清男氏の曾孫)を東京南荻窪にたずねて、例の自家本をもう一度貸してもらい、また他のいろいろな資料を写させてもらつて、紀行文「あたみのもくず」を読み、そして註を加えたのがこの小文である。

念のため記すと、原本は七部からなる紀行文集である。すなわち

- 1 浪花日記 明治二十九年十一月、高知から大阪方面へ、末女の婚礼に
- 2 吾妻日記 明治三十年十二月、長男の妻寿衛を連れて、長男の病氣療養に合せて高知から東京方面へ。

旅行中に末女の死や、長男稜威氏(すまろ)の病氣療養などの記事がある。十三日間

3 墨田の水くさ 明治三十一年四月、住居は東京になり、墨田川辺りへの花見の一日旅行

4 熱海のもくず 明治三十一年四月、東京から熱海への十二日間の旅行

5 拾遺の花 明治三十一年五月、東京から小金井方面への散り残る花を求めての一日旅行

6 横須賀紀行 明治三十一年十二月、再び高知へ転居したらしく、高知を出発して横須賀への引越し旅行。八日間

7 安芸の道草 明治三十三年八月、海軍兵学校教官になって江田島の官舎に入った長男稜威氏をたずねる

廣島までの旅行記。十六日間
今迄紹介した文は第四部である。

この紀行文には、各部とも、一、二葉の自筆の見事な挿絵があり、絵描きならではと思わせるが、文を書き、和歌を読み、漢詩を試み、文字も美しい、また交際もひろそうだし、何しろよく旅行している。やはり特異な人であつたらうしもっともって理解したいが残念である。終わりになつてしまつたが諸種資料を提供していただいた吉松信彦氏、漢詩についてアドヴァイスを下さつた松岡岑昭氏に感謝申し上げます。

(佐久間俊治)



材木屋綺談 その三

たかた・きくせん

この作業
中出火し
て作業場
を全焼し
まだ少年
であった
私は、作
業場周囲
の竹林に

小峯山の小田原女子短大
が建つ地は、かつて閑院宮
別邸の豪壮な建物が偉容を
誇った場所である。その別
邸は大正十一年春に竣工し
たのだが、一年半後の大正
十二年九月一日の関東大震
災に遭って、あえなくも倒
壊し、宮の第二皇女寛子殿
下が圧死するという惨事に
なった。

火が入って、遠い私の家ま
で爆竹音が届き私の胸をふ
るわせたことを覚えていた。
さて関東大地震で借しく
も倒壊した建物は直ちに取
り片づけられ、解体材は片
隅に山と積み上げられた。
昭和に入ってから間もない頃、
私の父はこの山のような破
損材を払下げて我家に運ん
だ。何しろ土台から柱、造
作材に至るまで台湾松の節
無しの良材である。長さも
幅も厚みもマチマチ、その

てしまおう。そこで五尺(約
一・五m)もある鉄の梃子
を作り、先端に釘頭を挟む
溝をつけて大きなボールと
した。従って深くささった
大きな釘を引きぬく力はある
のだが、両手でなければ
持ち上がらぬその重量には
参った。

閑院宮別邸の残材

払下げを受けて儲けた話

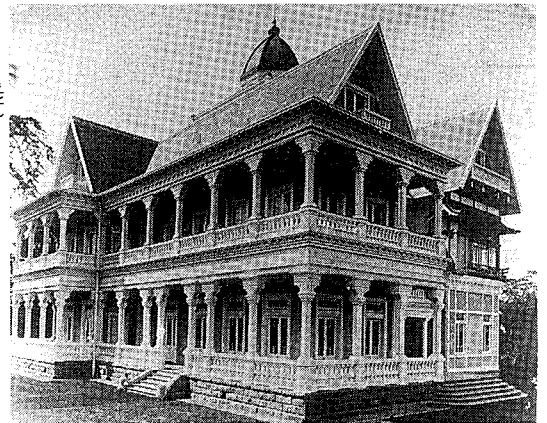
上至る処にホゾ穴があるとい
う文字通りの残材である
が、これを面倒みれば立派
な建築材に再利用出来る。
そこでまだ若かった私の仕
事は、この残材に塗られた
ペンキを剥し、打ち込まれ
た釘を一本々引き抜く作
業を毎日のようにヒマを見
てはつづけた。

常には高価なものであった。
ただ随分念を入れて釘を抜
いたつもりでも、時折り抜
き損じた釘が隠れていて、
そんな時チリチリと厭な音
をたてて鋸の歯を痛め、作
業を中止して鋸の歯をすり
直さねばならない。私は平
身低頭して、あやまるので
あった。かくして私はこの
大量の台湾松で大分儲けさ
せて貰った。しかし私は倒
壊前の美しい姿をこの目で
見ることが出来ず残念に思っ
ていた。

たまたま一
昨年図書館が
発行した『一
枚の古い写真
小田原近代史
の光と影』を
手にして、そ
の巻頭近くにか
つての閑院
宮別邸の写真
を目にして、
その華麗な建
築美に驚いた
のである。そ
してこの建物
の倒壊材の面倒
をつくづく不思議に思っ
たのである。

父の材木商を継いだ私は、
その後台湾松材を扱うこと
も時折りあった。台湾松は
内地の尾州松と肌色が異り、
独特の強い香りを持っていて
人々に好まれた。もっとも
内地に大口径の松材が少な
くなったので、年輪の古い
台湾松は尾州材の代用品

として珍重されたのである。
この当時は台湾は日本の領
土であったから、阿里山の
巨木を、閑院宮家の建築に
ふんだんに使用出来たので
あろう。余談だが戦前に造
営された明治神宮の大鳥居
は台湾産の巨木をそのまま
立てたものであることを材
木屋ならぬ一般の人々は、
ただ「でっかいなあ」と驚
嘆するだけである。



大正大地震で倒壊前の閑院宮別邸



古墳遍歴 (十三)

知られざる皇陵 (七)

飯田悟郎

崇神天皇陵

第十代崇神天皇は、御肇國天皇(ハックニシラスメラミコト)という和風諡号からも想像出来ますように、その存在が曖昧なそれ以前の九代とは異なり、実在の確かな、且つ大和朝廷の国家体制を整えた最初の天皇と考えられています。

御陵は奈良県天理市柳本にあり、山辺道勾岡上陵(ヤマベノミチノマガリノオカノエノミササギ)と呼ばれていて、古代史に有名な山の辺の道の中ほど、奈良から南へ桜井線の天理から二つ目の柳本で下車して東へ徒歩十分ならず、奈良から飛鳥へ到る国道一六九号線に面し、バス停は御陵前にあります。

それ故に存じの方も多くこの稿に相応しくないかも知れませんが、後述する諸陵墓の説明に適当な位置にありますために、此処にとりあげてみました。

しかしこの御陵が現在の行燈山(アンドンヤマ)古墳に治定されるまでにはかなりの年月を要し、かつ複雑な経緯を辿っています、曾って北の天理大学構内の西山古墳も、南にある渋谷向山古墳(現在の景行天皇陵)も、すぐそばの上山古墳も、崇神天皇陵だと考えられていた事もあり、この行燈山古墳も景行天皇陵とみなされていた時代もありまして、幕末になってやっと現在のように定められたのだそうです。

駐車場を兼ねている前庭と宮内庁の派出事務所(周辺の皇陵を含めて、御陵印は此処で戴けます)を過ぎ、石段を登って遙拝所に立ちますと、濠を隔てて長軸長二四二米、前方部幅百米の堂々たる御陵が現れます。

墳丘自体にそれほど手は入っていないようですが築造時そのままではなく、周辺の水田の灌漑用水を溜めるのに便利のように、周濠

を包む外堤には相当の改変が施されていますが、これについては数多の記録が残されていて、当時の様子が良く分かっています。

振り返りますと、眼下にアンドン塚(陪家とは言えこの塚は神奈川県下のどの古墳よりも大きいものです)と南アンドン塚、さらに国道を隔てて天神塚(此の古墳発掘の際、埋葬施設はなく、見事な副葬品だけが出土し話題となりました)、そして幕末まで織田氏一万石の城下町であった柳本の町並が広がります。当時の家並がかなり残っていますので、北へ伊勢神宮よりも創始が古いといわれる大和(オオヤマト)神社まで一キロほど、町内をぶらぶら歩くのもまた楽しいものです。

北は古刹の長丘寺を間に置いて後述する畝田陵が望まれ、東は本邦唯一の双方中円墳である櫛山古墳から龍王山に連なり、南には上山塚から景行天皇陵、さらに、もしヤマタイ国が大和にあったなら、ヒミコの墓であろうとされる箸墓など、巨大古墳が続き、古代史のロマンをかきたてる三輪山が聳えています。

畝田陵

畝田陵(フスマダノミササギ)は西殿塚古墳とも呼ばれていて、前述の崇神陵の北一キロほどに位置する長軸長二一九米、後円部径一三五米、前方部幅一一八米、標高一二五米前後の龍王山から派生する屋根上の傾斜地に立地し、南北方向に主軸を置く大型の古墳で、武烈天皇の皇女で、後に第二十六代の継體天皇の皇后となられた手白香皇女(タシラカノヒメミコ)の御陵として明治九年に治定され、現在に至っています。

延長五年(九七) 編纂の『延喜式』(諸陵寮)には畝田墓として、「手白香皇女、在大和國山辺郡、兆域東西二町、南北二町、無守戸、令山辺勾岡上陵戸兼守」との記載があり、これに従えば畝田陵に守戸はなく、崇神天皇陵の陵戸が兼ね守っていたらしく、その近在する位置関係を知る事が出来ます。

が、それにしては少しく離れすぎているようでもあり、又此の古墳はバチ形に開く前方部や、後円部及び前方部にある方形壇の存在

等の墳丘の形態、或いは遺物の出土状況等から考えられる時間的な位置付けでは、古墳時代前期前半期(前方後円墳編年二期)に編年されるべき古墳であり、この考古学的見解からすれば時間的に相当なズレがあり、手白香皇女を埋葬した畝田陵と考えるにはかなりの無理が生じます。

では、本当の畝田陵は、どこなのでしょいか。

前述の『延喜式』の記述を重視すれば、崇神陵の東方四百米に所在する高槻古墳がそれに相当し、位置関係を無視して時期的に確定出来る古墳を探すとすれば、西殿塚古墳の北西二百米にある西山古墳がそれとみる事が出来ます。

但し、高槻古墳は近年の測量調査の結果前方後円墳ではなく、時期的に遡る台状墓である可能性が大きい、このことですから、いろいろな点から見て、西山古墳が畝田陵の最も有力な候補と考えて良いでしょう。

ともあれ、古代史のロマンを求めて山辺の道を散策されることがあれば、一度これらの陵を訪れることをお勧めします。(続)

古文書講座 7

頼母子講掛返証文

内田 清

頼母子講と無尽

頼母子講は金銭の融通を目的とした相互扶助組織、積み金講のことです。講親(会主)という世話人の下に仲間を集め、一定の給付金額と口数を定め、一定の期日に掛金を納め、籤か入札によって仲間(講中・講衆)に順次金銭を融通し、全員に渡り終わると解散しました。

鎌倉時代に起こり、江戸時代になると頼母子講も無尽も区別がなくなり庶民の相互救済金融機関として大きな役割を果たしました。近代になると無尽会社・相互銀行にも発展しました。

総世寺の頼母子講

久野諏訪の原の総世寺は曹洞宗安叟派の本寺で広大な寺領をもっていました。掲載史料によると、天保期には何等かの資金調達のため

め頼母子講を行いました。

「総世寺頼母子講趣法帳」という会則があったはずですがまだ発見されていません。史料からわかることは、掛金が一回に金三分、年三回、四、八、十二月の十五日に集会して抽選会をする。この時当り籤を引いた末寺の正応寺は講金十八両三分を受取り、借用証文を出した。ということ、総口数・当り籤本数・集会に付き物の会食等の費用・花籤といわれる残念賞の金額等は不明です。

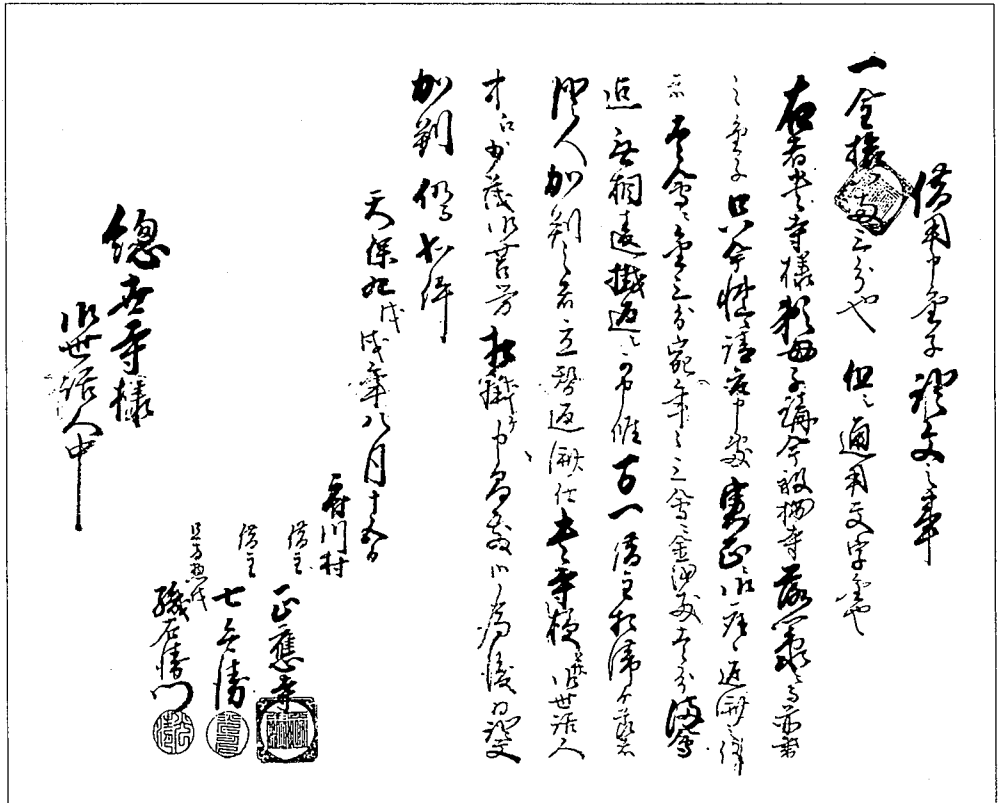
当り籤の金額に端数があるので利息分が加わっているらしいこと。担保(抵当)としての土地の記載がなく保証人だけなので満会に近い時期での当籤かもしれないことも疑問です。

色々な頼母子講と無尽

江戸時代には当地でも様々な講が作られました。近隣・

縁者数人による手軽なものから、毎月一朱掛四〇〇口の「清水新田長栄講」、そして小田原藩が指導して数十か村、数百口を加入させた「箱根無尽」

借用申金子証文之事
一合帳
右者寺様頼母子講掛返証文
天保九年 正月 十日
借主 正應寺
借入 七五両
借付 孫右衛門



借用申金子証文之事

一金拾八両三分也 但シ通用文字金也

右者、貴寺様頼母子講、今般拙寺落關二而前書

足を助け合う「屋根無尽」などの形でも利用されました(南足柄市史2-155)。

注意して欲しい語句

文字

ぶんじきん 文金に同じ。元文元年に正徳金銀を改鑄して造った。小判・一分判を総称する。江戸時代は金貨もその品質に因って流通の価値が違ったことを物語っている。

厚

まんかい 頼母子講などの最後の会、会期が終了すること。

掛金

かけかえし 無尽で講金を受け取った者が講金を掛け戻していくこと。落關後

の掛金を掛戻金という。

之金子只今たしか請取申處ととろ実正ニ御座候。返済之儀者、壹会ニ金三分宛年々三会ニ金貳兩壹分、満会迄無相違掛返シ可申候。万一借主相滞候節者、證人・加判之者立替返済仕、貴寺様并御世話人方江少茂御苦勞相掛ケ申間敷候。為後日證文加判 仍よって而如し件
天保九 戊戌年八月十五日

府川村

借主

借主

借主

旦方総代

正 応 寺 印
七 兵 衛 印
織 右 衛 門 印

総世寺様

御世話人中

(稲子正治氏蔵)

雑誌目次紹介

◇時空 第三号 93・11

「時空の会」発行
233 横浜市港南区日野
〒六二一九一四四
鈴木一正方

電〇盟 (843) 六七盟

時 空



第3号

A5 六六頁 五〇〇円
〒 三〇〇円

〈小説〉

エフエンス 空の道

篠原 敦子

五月四日の夜

前山 光則

〈研究〉

柄谷行人参考文献目録

昭和三十四年〜平成四年

鈴木 一正

「編集前記」を載せている。

それは、作品の簡単な解説で、「読者の方に、少しで

も作品に近づかせたい、作品を知っていただきたい、そして読んでいただきたい、という意図からである」と、編者は述べられている。

鈴木さんは本会々員であるが、今迄「北村透谷主要参考文献・解題、年譜」

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」(旺文社文庫、昭五)、

「武田泰淳研究案内、参考文献目録、年譜」(観賞日本現代

文学云)角川書店、平2)

などを発表されている。なお、今回は柄谷行人をとりあげたことについて、柄谷氏は、「現代指導批評家として政治活動までに含めて活躍中」で、「氏の言動には議論があるだろう」が、

「氏が江藤・吉本後の最も有力な批評家であることは疑問の余地がない」と述べられている。

街の掲示板より



紅蓮洞・坂本易徳 ⑩

岡部忠夫

足柄県から
神奈川県へ

明治九年(一八七六)四月十八日、足柄県が廃され、その管轄下にあった旧相模国内六郡(『明治小田原町誌』の四郡は誤り。足柄上・足柄下・淘綾・大住・愛甲・津久井)は神奈川県へ、旧伊豆国一田及び伊豆七島は静岡県へ(伊豆七島は、明治十一年一月十一日、東京府の管轄となる)それぞれ吸収された。

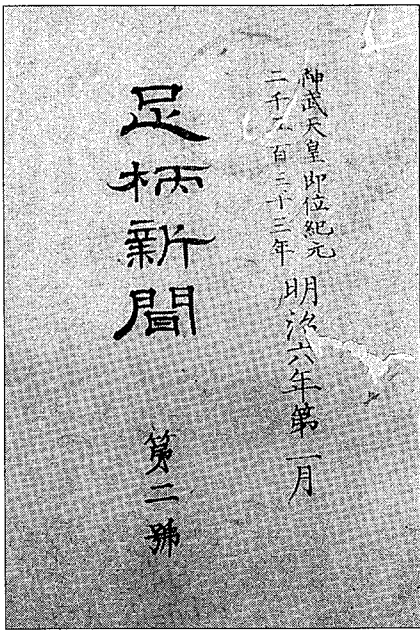
ることになった。

この頃の足柄県下の事情を伝える前に、明治五年(一八七二)十一月に創刊の『足柄新聞』のことや、それに関連したことを先に記しておきたい。

『足柄新聞のこと』

『足柄新聞』の発刊には足柄上郡松田惣領出身の中村舜次郎(一八四〇〜一九三三)が係わっている。

明治六年(一八七三)一月、



神仏合体の中教院が小田原に置かれると(前号参照)柏木県令は、中村の人物を見込んで、彼を中教院の中講議に任命し庶民の教導に当たらせようとしたが、彼はそれを受けなかった。その代わりに、中教院が係わっていた『足柄新聞』が振わないのを見て、その刊行を引受けた。しかし収支合わず二年後に休刊の憂き目を見た。

しかし、柏木県令は彼を明治八年(一八七五)八月、足柄県第一大区副区長に拾いあげている。そして足柄県が神奈川県に吸収されても、地区名が変わっただけで、その職はそのままだった。更に十年八月第二十一区区長となり、同年十一月には足柄上郡長に任命され、その後、足柄下郡長、再び上郡長、さらには、行政裁判所評定官を歴任、退官後は、衆議院議員に当選している。さて、『足柄新聞』について触れると、その体裁は和紙二つ折の木版刷りで、初期多くの新聞がとった形と同じである。掲載の法令など足柄県から便宜を受けたものであろう。この新聞について、『神奈川県史』

(通史編4近代・現代1)は、次のように記している。

……これまで神奈川県下の新聞といえば、ことごとく横浜において発行されてきている。ここに及んで横浜にくらべれば開化の遅れた足柄県からも、独自の新聞が誕生したことは、注目に価すると言えらるであらう。

発行にあたっては、足柄県の地域が「地勢険險、人民固陋、墮テ新見異事ノ伝播極メテ遅ク、刊行ノ料ニ充ルモノ亦多カラザルベシ」と称している。けれども記事は、県の人事から県政一斑、さらに県下の事件など、多岐にわたっており、中央からの布達も掲げている。まさしく地方新聞として、独自の報道をなしていたのであって、この地方の動きを見る上には、貴重な記録といえることができる。

さらに、『神奈川県史』は『足柄新聞』がいつ迄続いたかについて、明治五年(一八七二)に第一号及び第二号を発行、翌年一月に改め

て同年の一号を発行、五月発行まで八号の存在が確認されているが、いつ迄続刊されたかはっきりしない、と慎重な表現で記している。

後で引用する明治九年(一八七六)九月二十六日付『横浜毎日新聞』の「小田原の近況」には、『足柄新聞』は、月に六号ずつ発行されたが、同八年七月「新聞紙条令」が定められて以来編集人が得られなくなったので、その七月休業したとあるので、あるいは、『神奈川県史』の執筆者は、はっきりした記述を避けたのかもしれない。

明治七年

|| 政論新聞時代に突入 ||

ここで明治七年についてちょっと記しておきたい。

この年は、東京を始め各地方の新聞が初期啓蒙的報道から脱却して、一斉に政論を華々しく展開する時代に突入している。

その切っ掛けは、『日新真事誌』が、征韓論に破れ下野の、前参議板垣退助・副島種臣・後藤象次郎らが太政官左院(立法機関)に提出した「民撰議院設立建

白書」を掲載してからである。

提出されたのは七年一月十七日で、掲載日付を『自由党史』(『岩波文庫』)で見ると翌十八日となっていて、当時の新聞としては物凄い早さと思われる。

建白は大きな反響を呼び自由民権論が沸きたったのである。

すると、当時ドイツ国法学の権威といわれ宮内省四等出仕の加藤利之が民選議員設立尚早論をまとめ、板垣、副島、後藤の三名に送った。

加藤の反論は、翌二月三日付の『日新真事誌』に掲載された。

加藤は、森有礼の提唱で福沢諭吉や西岡、津田直道、中村正直、西村茂樹ら新しい時代の先頭に立つ学者が組織した民衆啓蒙団体「明六社」(明治六年に結成されたのでこの名がある)のメンバーで、福沢とは基本的には同じ立場であり、かつては民権論を著わしたが、その主張を引っ込めての反論であった。

これに対し、板垣らは、その反駁を『日新真事誌』に公表した。

すると、大井憲太郎が『日新真事誌』に馬城台次郎の仮名で投稿、加藤の尚早論を質すと、加藤は、『東京日々新聞』に反論を発表、二人の間にはその後二回も論争が行われた。

明六社の面々も黙ってはいなかった。森有礼は議院建白批評を、西岡は反対論を、津田直道は賛成論を、それぞれ『明六雑誌』に繰りひろげ、一方、西村茂樹は建言を『日新真事誌』に発表、賛否の説は交々発表されたのである。

この頃の新聞の動向を見ると、『郵便報知新聞』は、福沢諭吉門下、岡敬孝らが入社して以来、自由民権運動に肩入れするようになり、この新聞は『日新真事誌』と共に、大井憲太郎や古沢滋(「民権議員設立建白書」の起草者)らが、論戦を展開する拠り所となった。

一方、旧幕臣の福地源一郎は、『東京日々新聞』に拠って、加藤利之の尚早説を支援し、政府を擁護する立場をとった。

以上の他に東京で発行された新聞のうち、民選議院設立の急進論の論陣を張ったものに『朝野新聞』『曙

新聞』があり、尚早論を唱えたのに『新聞雑誌』がある。それぞれ「民権新聞」と「官権新聞」に色わけされたが、『日新真事誌』は、両論を載せているので、中立の形となるが、維新政府の首脳にとっては、苦々しい存在であったに違いない。

征韓論に関する活発な政論を封ずるため、明治六年(一八七三)年十月十九日、太政官布告で、十八条から成る『新聞紙条目』を公布、

国体・政治・法律の批判、民心の動搖・淫風の誘導、無根の中傷、官吏の秘密漏洩など禁止、違反する者を処罰する規定を盛りこみ、言論統制を行ったが、自由民権論の台頭に立ちほだかることは出来なかった。

まして、『日新真事誌』を発行するのは、治外法権を持つJ・R・ブラックというイギリス人である。うまく取締りをするには出来なかった。

『日新真事誌』の創刊は、明治五年(一八七二)三月十七日。事務所は東京芝増上寺内の源興院に置いた。当初隔日発行であったが翌月か

ら日刊となり、六月には鉄道停車場で販売許可を受けた。ブラックには荒木政樹という日本人の協力者がいた。荒木は『日新真事誌』の命名者であったという。十一月には、左院の指定を受け、その議事、議案、建白などの独占掲載の権利を手に入れた。「左院御用」の肩書きを得た訳である。

先に記した「民権議院設立建白書」を公表できたのも、左院の指定を受けた結果である。

それにしても、ちょっと首をひねりたくなるのは、政府が手を焼く、自由民権論の台頭の切っ掛けとなる、建白書を公表させる機会を、どうして与えたかということである……。

どのような事情があったのであろうか？

それはともかく政府には、即時民選議院設立論即自由民権論の論争を掲載する『日新真事誌』は、邪魔な存在となった。

そこで、政府は、その排除に乗り出すことになる。明治八年一月、ブラックを左院に雇いあげる代りに、『日新真事誌』から手をひくように申し入れた。ブラック

は承諾した。そして、政府は、この年の六月二十八日、「新聞紙条令」と「讒謗律」を公布し、言論の取締りを強化した。しかも、ブラックの存在を邪魔とみて、七月に解雇をしている。

「新聞紙条令」は、第十六条から成るが、特に政府の変壞、国家の顛覆、騒乱の煽動、法律の誹毀、他人の教唆などに重罰を規定し、また、新聞社の持主、社主、編集人は日本人でなければならぬと定め、外国人の新聞発行を不可能とした。

「讒謗律」は、第一条に「凡ソ事実ノ有無ヲ論ゼズ人の榮譽ヲ害スベキノ行事ヲ摘発公布スル者之を讒毀トス。人の行事ヲ挙ルニ非ズシテ悪名ヲ以テ人ニ加ヘ公布スル者之ヲ誹謗トス」とし、「著作文書若クハ畫図肖像ヲ用ヒ展開シ若クハ発売シ若クハ貼示」して人を讒毀、誹謗する者に対し

処罰を定めたものであるが、文章だけでなく戯画や漫画に対しても取締の対象とした訳である。

この「新聞紙条令」と「讒謗律」は、ほとんどの

言論を封じたため、福沢諭吉は憤慨し、同年九月一日の明六社の会合で、「『明六雑誌』ノ出版ヲ止ルノ議案」を読みあげ、多くの同人が同意して雑誌の廃刊となり、明六社も自然解体となった。また、その他廃刊紙誌が続出した。

なお、『日新真事誌』の

社長名義は、ブラックから、その協力者の荒木政樹と代ったが、他の日本語新聞の競争に敗れ、この年の十二月廃刊となった。

『足柄新聞』の廃刊

ところで、『足柄新聞』は「新聞紙条令」や「讒誘

律」が定められた前年の明治七年(一七〇)廃刊されたとする(『日本出版百年史』)のがよいのではないかと思われる。前述の「新聞紙条令」が定められて以来編集人が得られなくなったので休業したということは、『新聞紙条令』に仮託しての事と思われる。

明治十年前後、各地に自由民権運動がもえ盛ったが、小田原地方では、極めて微弱であった。後年のことだが、「大正デモクラシー」という言葉で表現される事象も、小田原地方では、極めて散発的で微々たるものであった。政治的社会的運動の基盤である土壌が痩せているからだ、土地柄に結びつけてしまえばそれ迄であるが……。

「もしも」と仮定を歴史の中に持ち込むのは嫌われる事だが、『足柄新聞』が継続発行されていたとしても、自由民権運動の論調を展開し、紙面を飾っていたかどうか甚だ疑問である。ともあれ、『足柄新聞』が発行されたのは、小田原が城下町・宿場町として相模の中心地であった時代の残像現象というものだろうか……。(続)

丹沢の植物

⑬

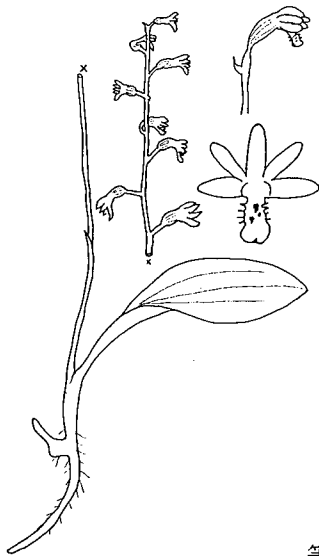
城川四郎

箱根蘭を、丹沢の植物という題名のもとでとりあげれば、変に思われる方もいらっしゃるのではないかと思う。たしかにハコネラン

は最初に箱根で発見され、その採集者は底倉温泉葛屋旅館の沢田武太郎氏であった。氏はすぐれた植物研究家として、その業績とともに

識者の間ではよく知られている。ハコネランの学名には、氏の功績を讃えて氏の苗字が種小名とされている。そのようにハコネランが箱根とくに縁の深い植物であることは間違いない。それにもかかわらず、私はハコネランをあえて丹沢の植物の一つとしてご紹介したい。その理由は、私の山歩きの体験から、丹沢では比較的簡単にハコネランに出会うことができるが、箱根ではなかなか見つけることができないからである。おそらく発見

ハコネラン (らん科)
Ehippianthus sawadanus
(F. Meak.) Ohwi



筆者原図

植物の一つとしてご紹介したい。その理由は、私の山歩きの体験から、丹沢では比較的簡単にハコネランに出会うことができるが、箱根ではなかなか見つけることができないからである。おそらく発見

地の箱根より、丹沢の方の分布個体数ははるかに多いからであろうと思っている。ハコネランはフォッサ・マグナ要素の植物で、埼玉・神奈川・静岡・奈良の各県に分布することがわかっている。全国的に分布が知られているコイチョウランが、フォッサ・マグナ地域で種の変成作用を受け、ハコネランが新生したものと考えられている。だから、植物の種の形成や分布を研究するのにたいへん貴重な植物である。ラン科の植物は一般に気むずかしく、個体数の少ないものが多いので、業者や山草愛好家などの標的にされると、またたく間にその地域では絶滅という

ことになる。ところが不幸かハコネランは、鉢植えにして眺めたくなるような花ではなく、地味で小さいから、人にとられてしまう心配はなさそうである。初夏の頃、ブナ帯のスズタケの茂る林縁に咲く。唇状の花弁には不規則な紫斑があり、両側は鋸歯状になっている。

お詫び

前号の図でウスギオウレンの科名「きんぼうげ科」が「らんきんぼうげ科」に、また学名「Tamura」のTが小文字のtとなっておりました。編者が校正の折に誤植を見落したためでした。お詫びを申し上げます。

内田盛雄氏を悼む

富田千春

今年の正月十六日、千代では五年がかりで念願の道祖神の山車ができ、曳き初めが盛大に行なわれた。その時世話係りの一人が「高田の同級生が亡くなって…」との話をきき、内田盛雄さんの死亡を知った。

盛雄君は内田武雄さんの二男で、父武雄さんは、小田原史談会の産みの親、育ての親で、終戦後の発足当時、田島の杉崎正五氏等と共に東奔西走して、文化財、遺品等の展示会を開いたり、史談会々報の編集に心血を注がれたが、昭和五十三年五月、病で六十九才の若さ

で他界された。その時の事を「内田武雄氏を偲んで」ありし日の内田盛雄氏



と題した追悼文を『小田原史談』第九十一号に掲載させて貰った。父亡きあと父親に代って、地区の会費の集金、会報配布、諸連絡等の役員を続けて貰っていた。

盛雄君も父に劣らない熱心な方で、平塚の三共化成に勤務し乍ら、陶芸、絵画にすばらしい腕を振るうと共に、色々の史談会にも関係して研究発表をされておられた。

昨年の九月、東京吉祥寺近鉄百貨店で、東京の「道鏡を守る会」大阪の「道鏡を知る会」が主催となって、弓削道鏡資料展が開催される事になったが、盛雄君の発案で、千代廃寺の鬼瓦出品をといて、本部から連絡があった。その件や、史談会々報の配布等で、七月八日の夕方盛雄君宅を訪れたら、丁度兄さんの雅廣さん

さんも一緒に、史談会の事や行事等色々元気に話合っ

きいた。

その後小康状態ともきいたが、闘病生活六ヶ月、一月十八日付神奈川新聞、お

くやみ欄に、「内田盛雄さん15日午後2時43分、脳こうそくのため死去、57歳、告別式は18日午後1時から、小田原市高田127の自宅」の記事がのっていた。西湘美術その他各方面に活躍して居られたので記事になったのでしようが、物事に熱心で、これから尚々の調査、研究の活躍を期待していたのに、五十代では惜しい事です。

日同窓会長の時「先生、千代台地の貴重な古瓦ですの

で、校舎前に瓦塔を造りましょう」といつてくれたが、次々、中学校長が替わり、瓦片は瓦礫で邪魔であり、運動場に穴を掘って埋められて、内田君の発案も実現出来ず消えてしまった。

尚、絵では国画会その他にも関係し、大作の発表の他、千代の山車の前面の大灯籠の武者絵を画いたり、菩提寺に奉納予定の下絵で未完成だが、折角なのでと葬儀の時家の横に畳一枚の大作の仏画が飾られていた。

計報

鈴木恒夫氏

(小田原市城山一三二)

昨年四月二十六日逝去されました。享年八十三歳

柏木純子氏

(湯河原町吉浜一六〇一)

昨年十二月二日逝去されました。享年五十五歳

神保為雄氏

(小田原市東町二一三)

昨年十二月逝去されました。享年七十四歳

加藤金次氏

(小田原市新屋三三一)

昨年十二月二十五日逝去されました。享年七十三歳

内田盛雄氏

(小田原市高田二二〇)

昨年十二月十五日逝去されました。享年五十七歳

ご冥福を祈ります

小田原史談会諸行事等

初詣 静岡浅間神社
平成六年一月二十二日

(出晴 八時〜六時)

(コース)大井松田I.C.―富士川
S.A.―静岡I.C.―駿府城―丸子丁
字屋(昼食)―静岡浅間神社―
登呂遺跡―製茶工場―静岡I.C.―
焼津I.C.―焼津さかなセンター―
鮎沢P.A.―大井松田I.C.

〔参加者〕(順不同敬称略)
福田千春、岡部忠夫、和田登、
飯田悟郎、山口一夫、向山重忠、
曾我保夫、和田ヤス子、岩本武、
伊予田良太郎、増田任司、小西
マツ、西山辰三、湯川玲子、斎
藤精一郎、河合浩太郎夫妻、田
口鏡子、小林千鶴子、角田道・
幸子、土谷桂子、内田美枝子、
山口広子、剣持芳枝、和田治助、

(費用)六千円

内田公子、西郷寛子、杉山竹二・
房枝、石黒栄治、鶴井道泰、江
口登有子、久保喜久江、遠井喜
代子、譲原武、吉池清、中村俊
郎夫妻、三尋木潔・啓子、小室
泰子、河本登志、安藤美夫妻、
清水田鶴子 以上四十六名

・裾野まで雪積りけり富士光
る
・最初の見学は駿府城。ビルに
囲まれて緑がない。最近復元さ
れた隅櫓が美しい。
・駿府城復元進み寒桜
・寒マラソン連隊跡を走る子
ら
・家康の手植の蜜柑寒雀
次は浅間神社である。こんな
立派な建物廻廊は数少ない。
・華麗なる浅間づくりショー
ルして

・屋敷は丸子の丁字屋。
・大寒の昔の味やとろろ汁
次は登呂遺跡国の特別史跡で
ある。弥生時代の人となる。
・赤米や登呂遺跡の田春を待
つ
・冬ざれの登呂の家屋に一步
入る
・最後は製茶工場と焼津魚セン
ターである。
・大寒に製茶の機械なほ廻る
・生きのよき焼津のまぐる冬
深し

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

足柄香粧株式会社

飛鳥 魚屋

紳士服のアメリカヤ

画材 ガクブチ ヲウエ

伊勢治書店

伊豆箱根トラベル 小田原

かまぼこ

南足柄関本 おぎの整形外科・歯科

税理士 小澤重治事務所
公認会計士

株式会社 小田原魚市場

小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スギヤマ

小田原中央青果 株式会社

オリオン座

かまぼこ籠

令学苑

鐘紡株式会社小田原工場

カネボウ化粧品鴨宮工場

神尾食品工業 株式会社

木地挽 日下部産業 株式会社

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のごらく さくらい

宝飾専門店 Shimano

正栄堂

中華料理 昇玉

杉山水道工業 株式会社

鈴木 資本まぼこ

辰寿堂スポーツ

大営不動産

刺烹 おる海

茶半家具株式会社

ちんぎょう本店

土谷建設株式会社

角田ガクブチ店

東京電力(株)小田原営業所

株式会社 東華軒

トーホー建物 株式会社

八小堂書店

八子マサ店

平井書

富士写真フィルム 小田原工場

株式会社 報徳

松坂屋

学生専科 マルク

食器の店 マルサンストア

みつゆき設計

諸星運輸グループ

株式会社 美濃屋吉兵衛商店

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

山口菓子舗

株式会社 ユアサコーポレーション 小田原
小製作所

防災器具 優光社

小田原史談 (30) 156号

発行所

振替

横濱(2) 六四三三六

年会費 普通会員三千円